文化庁

平成26年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業

『だんじりを活かした地域共働事業』

報 告 書

平成27年3月

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会

ごあいさつ

本書は、平成 26 年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業）を得て実施してきた事業について、その可能性と拡がりを期待し、報告するものです。

本事業では、「だんじり」をキーワードとして、大東市立歴史民俗資料館、原野農芸博物館、京都造形芸術大学、大東市教育委員会、大東市立歴史民俗資料館市民学芸員連絡会がそれぞれの立場から博物館活動に関わってきました。

原野農芸博物館は、平成 22 年奄美豪雨によって、収蔵庫・展示室ともに土石流の被害にあいました。京都造形芸術大学では、はやくから土砂の除去、資料の救出といった復興作業を支援してきました。そのなかで、土砂に埋もれた資料から「小松源助」銘のあるだんじりが発見されました。

大東市教育委員会では、平成 24 年の調査において中之町地車保存会所有のだんじりに「小松源助」銘があることを確認していました。また大東市立歴史民俗資料館では、平成 25 年より市民学芸員とともにだんじりに関わる調査・展示を行ってきました。

これらの経緯により、本事業では「小松源助」という彫物師を主題として、市民学芸員・学生・地域とともに調査・展示といった博物館活動を展開することとなりました。本書を通じて、これらの調査と活動の成果を報告し、同様の事業を行う際の参考になれば幸いです。

最後になりましたが、本事業を実施するにあたり調査にご協力いただいた中之町地車保存会をはじめ、関係機関、各位に厚くお礼申し上げます。

平成 27 年 3 月 31 日

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会

委員長　　笠井 敏光

目　　　次

・ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

・目　　次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

・はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５

・第 １ 章　原野農芸博物館とだんじり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６

・第 ２ 章　被災から復興まで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３

・第 ３ 章　市民と共働しただんじり調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１９

・第 ４ 章　だんじりの彫物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０

・第 ５ 章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４６

・おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５９

・謝辞・奥付・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６２

【凡例】

1.本書は、だんじりを活かした地域共働事業について、展示「だんじりの彫物－小松源助から探る－」・関連フォーラム「小松源助から探る」の内容を編集し、報告書としたものである。

2.特に記載がない限り、執筆はだんじりを活かした地域共働事業実行委員会が行った。表紙のデザインについては、京都造形芸術大学学生 大野木喜世が行った。

3.「だんじり」は、「地車」とも表記されるが本書では、「だんじり」の語で統一をした。

4.大東市内の保存会の名称については、下記表の通り、略称を用いた。

	名称	略称		名称	略称
1	東之町地車保存会	東之町	17	江ノ口南若中地車保存会	江ノ口南
2	北之町地車保存会	北之町	18	大箇だんじり会	大箇
3	中之町地車保存会	中之町	19	下野地車保存会・下野地車若中・住道青年団	下野
4	四條之町地車保存会	四條之町	20	押廻地車保存会	押廻
5	辻之町地車保存会	辻之町	21	奉賛会（御供田）	御供田
6	深野北地車保存会	深野北	22	灰塚だんじり保存会	灰塚
7	平野屋地車保存会	平野屋	23	大野地車保存会	大野
8	谷川地車保存会	谷川	24	朋来地車保存会	朋来
9	南新田・元町青年団	南新田・元町	25	氷野地車保存会	氷野
10	野崎第一地車保存会	野崎第一	26	赤井消防団	赤井
11	野崎第二秋祭実行委員会	野崎第二	27	御領地車保存会	御領
12	寺川地車保存会	寺川	28	東諸福地車保存会	東諸福
13	中垣内地車保存会	中垣内	29	西諸福地車保存会	西諸福
14	龍間自治会	龍間	30	新田地車保存会	新田
15	西ノ口若中	西ノ口	31		新田
16	江ノ口北若中地車会	江ノ口北	32	太子田地車保存会	太子田

はじめに

◆趣　　旨

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会は、「だんじり」を活かした地域共働の促進・地域と博物館の連携強化を図ることを目的としています。

本事業の目的の一つは、市民と学生が共働でだんじり調査・展示を行う中で、双方が学び合う環境を構築するという「人材育成」を目的としています。二つ目には、市民と学生が「地域」に入り調査を行うことで、市民・地域・博物館の連携を強化することをめざしています。三つ目には、原野農芸博物館所蔵のだんじりと大東市内にある小松源助作と推定されるだんじりの彫物の調査の比較をつうじて、部材特定の手がかりとし、学術的調査の可能性について検討します。

◆事業概要

平成 26 年度は、次の事業によって構成されています。

１：だんじり調査事業

学生と市民を対象としてワークショップや講義、実習といった調査前プレ講座を実施します。その後、原野農芸博物館と大東市域の、小松源助製だんじりの比較調査を市民や学生が主体となって行います。

２：だんじり展示事業

大東市立歴史民俗資料館では、調査内容や調査活動を中心として、市民と学生と地域がどのようにかかわり調査を行ったのかという過程を展示します。一方、原野農芸博物館では、もともとだんじりが所在した豊中分館（galleryA.l)で、比較調査の成果と彫物を中心に展示を行います。

◆だんじりを活かした地域共働事業実行委員会

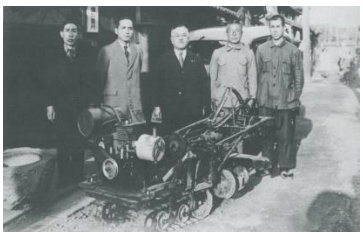
委員長	笠井敏光	大東市立歴史民俗資料館館長
副委員長	原野耕三	原野農芸博物館館長
委員	大野木啓人	京都造形芸術大学副学長
委員	伊達仁美	京都造形芸術大学教授
監事	黒田淳	大東市教育委員会生涯学習課参事
事務局長	小西立也	大東市立歴史とスポーツふれあいセンター副館長
事務局	武井二葉	大東市立歴史民俗資料館副館長
事務局	溝辺悠介	大東市立歴史民俗資料館学芸員

第１章　原野農芸博物館とだんじり

原野農芸博物館は、原野喜一郎（明治 41 年～平成 13 年）が昭和 33 年頃より集めたコレクションをもとに、昭和 39 年に豊中で開館します。農業・農具から始まった同館の設立経緯から、奄美大島へ移転するまでの歴史を紹介します。

１．原野農芸博物館の設立経緯

当館は、先代の原野喜一郎が設立しました。そのきっかけは、父の「人生観」に基づくものであると思います。



改良耕うん機と原野喜一郎
中央がヤンマー山岡孫七社長

喜一郎は今の新大阪駅周辺で水稲栽培をおこなっていました。このあたりの水田は「ドタ」といい、腰のあたりまで沈むような深田で、田仕事がやりにくい湿地帯でした。そのため、山田（吹田）の人たちは腰までつかる所には嫁はやらず、また新大阪の人たちは月夜の光で田が枯れる所には嫁はやらず、などという逸話を年寄りから聞いたことがあります。この一帯の水田の排水をよくし、三輪車が通る位の木造橋をつくり開墾、水田整備など行い、現ヤンマー創業者の山岡孫七社長と自動耕うん機を考案し、おそらく喜一郎が初めてトラクターを使用しました。

昭和 18 年原野甘藷育苗園

さらに戦時中は食糧増産のためサツマイモ育苗に力を注ぎ、また戦後は水耕栽培で液体肥料を現住友化学と共同で事業化することにも貢献しました。このように「農業にかけた人生」のなかで独自の「人生観」が芽生え育ったと考えています。

そしてこの「人生観」によって博物館構想がうまれる結果となったと思っています。その博物館は昭和 39 年に開館します。まだ全国的においても庶民の生活資料などは一部の研究者以外は関心が薄かった時期で、ましてや農業博物館などはなおさらのことでした。農具を収集しているときに喜一郎は時折知人から「原野さんこんな百姓が捨てたクワやスキなどの農具を集めて人に見せているが、そんなお金があるなら自分の家でも建てたらどうか」と

豊中時代の原野農芸博物館

忠告を受けたり、笑われたりもしました。しかしよく考えてみると弥生時代から現代まで約 2000 年、スキやクワの原型は少しも変わっていない。ただ木製が金属に変わっただけであり、今日の文化と産業の隆盛を築きあげた背景には、長い年月培われた農業という基幹産業があったからです。祖先の貴重な遺産を収集し、後世に残さなければ日本の農業の歴史が消滅するのではないでしょうか。このような要因の中で、若き日の感動が博物館設立の原動力となりました。

（原野耕三）

２．原野農芸博物館のコレクション

昭和 33 年頃、急速に都市化する農村を前に、庶民の生活文化財としての民具の蒐集が始まりました。鋤・鍬・除草機・胡粉製造機・砂糖搾機などの民具の他、桃山時代末期の建築様式をのこした旧葛岡家の民家、奄美の高倉などを移築して野外展示していました。また、上方祭礼縁日でみられた「のぞきからくり」や「だんじり」など、寄贈を受けて収蔵された資料も多くあります。

３．原野農芸博物館の移転

昭和 63 年、豊中にあった原野農芸博物館は、鹿児島県奄美大島に移設されることになりました。

併設されていたサボテン大温室、観葉植物温室、熱帯植物室・天然記念物日本鶏舎など、農芸に関する施設も一部、移転しました。もちろん、寄贈を受けた資料も移動します。「だんじり」はその躯体が大きいため、運搬はもちろん、展示室の設計が苦労したと言われています。博物館だけでなく、サボテン園・水族館・温室に、電車のない奄美大島で子どもたちに乗ってもらいたいと運んだ「ミニ電車」なども併設し、行楽・楽しみを提供する場としての役割も担っていました。

だんじりにあわせた展示室

フォーラム「小松源助から探る」報告

原野農芸博物館のだんじり

原野農芸博物館　原野幸治

１．原野農芸博物館概要

当館は、昭和 33 年より国内外の農具や民具の収集を始め、このコレクションを中心とした服部農業博物館を豊中で昭和 39 年に設立しました。その後、昭和 43 年に原野農芸博物館と改名し、昭和 63 年より鹿児島県の奄美大島の住用村（現在の奄美市）に移設し、平成 4 年には、財団法人奄美文化財団原野農芸博物館、平成 25 年 4 月に一般財団法人奄美文化財団原野農芸博物館となり現在に至ります。

照葉樹林文化地帯の暮らしと民具をテーマに、アジアの生活用具や民族衣装などの有形文化や祭祀儀礼や民俗伝承などの無形文化の調査収集をおこない、南西諸島文化との比較展示を試みています。

設立当時の様子（昭和 40 年頃）

２．だんじりの寄贈

だんじりを譲り受けた際の『山車由来書』によれば、大阪府中河内郡枚岡村（現在の東大阪市）宝蔵新家の集落の人達が、大阪浪花本町の全備彫工小松源助に委嘱して、3 年有余を経て、明治 19 年に完成しました。使用した欅材は全国各地から集められ、建造に要した費用は寄付金と集落の共有地（6930 ㎡）を売却してその資にあてました。しかし完成後間もなく近畿鉄道（現在の近鉄）の開通と区画整理等で祭礼用として曳行することが困難となり、格納庫で保管されていました。

大正 15 年頃、吹田市の高浜神社正遷祭で曳かれるだんじり

当時吹田南町（現在の吹田市）ではだんじりを熱望する声が若者層にあり、町内全体がこの声をとりあげ、他町村に劣らぬだんじりを購入することになり、前記のだんじりを大正15年6月に解体の上運搬しました。その後高浜神社正遷祭や今上天皇の御大礼祝賀等に出仕し、地区内全域に巡行しました。しかし時代の変遷に伴い架線や民家等の障害が多くなり、その巨体を曳航することが困難となり昭和38年に10月に当館に寄贈されました。

寄贈をうけて、当館で保存中のだんじり

３．大阪から奄美へ

当初豊中にあった原野農芸博物館ですが、博物館がまるごと奄美大島に移設されることになり、だんじりもまた奄美大島へと移送されることになります。

昭和 63 年、だんじりは解体されて船で奄美大島住用村（現奄美市）へと運ばれました。展示室は、だんじりに合わせて後から建設されました。移設された原野農芸博物館は、正面にマングローブの海が広がり、裏山は亜熱帯の森で覆われる自然豊かな立地にあります。

４．奄美でのだんじりの被災

平成 22 年 10 月 20 日、奄美大島を襲った集中豪雨により、博物館の裏山が崩れ、土石流が博物館をのみ込み、一瞬にして壊滅的な被害を受けました。

土石流は、展示室や収蔵庫を押し潰しました。展示資料や収蔵資料は土石流とともに流され、数トンもあるだんじりでさえ、土砂によって押し上げられている状態となってしまいました。なかには海にまで流れてしまった資料もあります。

館内の土砂には、多数の収蔵資料が紛れており、資料と分からず廃棄されてしまったこともありました。

敷地内に流れ込んだ大量の土砂は、博物館職員や支援者が除去作業を行い、被災から一年半の年月をかけて、ようやくすべての土砂が除去することができました。

そして平成 25 年 12 月に関係者の協力のもと、リニューアルオープンし「復興記念展“クサビ式締め太鼓―奄美とアジア―」展を開催することができました。

博物館再開に至る現地の状況

平成 22 年 10 月 20 日、鹿児島県奄美地方を襲った集中豪雨により、原野農芸博物館は甚大な被害を受けました。過去の林道工事で弱ったと思われる斜面が豪雨によって崩れ、その結果発生した土石流が展示・収蔵施設内に流入しました。当時展示していた資料のほか、収蔵庫内の資料の多くが欠損、破損、泥汚れなどの被害を受けました。なかには、修復が不可能なほど深刻な被害を受けた資料も少なくありません。被災前より常設展示しておりました「だんじり」も、大きな被害を受けた資料のひとつです。

被災した資料に対しては、付着した泥を落とすための水洗いを中心にクリーニングを進め、作業がある程度進んだ段階で台帳との照合も同時に並行しました。水洗いは彩色のあるものや水に弱い素材(紙や革など)のものは除き、毛質の軟らかいブラシ等を用いて洗浄後、風通しの良い場所で乾燥させるという手順で進めました。カビの発生を避けるため、水洗いは比較的乾燥している時期に限定して行い、扇風機や除湿機を適宜使用するという対策を講じています。

災害発生当時より、奄美大島内外から数多くのご支援を頂きながら復興作業を進めてきましたが、平成 25 年 12 月より一部再開館を果たし、現在は復興記念展「クサビ式締め太鼓ー奄美とアジアー」を開催中です。企画展開催に至るまでには、京都造形芸術大学様に多くのご支援をいただきました。なかでも、「だんじり」の復興作業に関しましては、歴史遺産学科の学生の方々を中心に、修復計画の作成から破損した部材の整理作業、各部材のクリーニングまで、全ての作業の主軸を担っていただきました。破損した彫刻の整理作業のなかでは、作者、小松源助の銘など、原野農芸博物館の「だんじり」の歴史的価値を新たにする素晴らしい発見をしていただきました。大きな被害を受けた原野農芸博物館の資料が、新たな発見とともに、活用・展示されますことを非常にうれしく思います。

（元原野農芸博物館学芸員　大島幸子）

乾式クリーニング作業

復興記念展示の検討（写真左　著者）

吹田市・南町だんじり

１．　吹田市のだんじり

平成 10 年に、六地蔵・西奥町・神境町・川面町・金田町・浜の堂・土呂須の 7 台のだんじりが吹田市有形民俗文化財に指定されました。一部は、吹田まつりや吹田歴史文化まちづくりセンター「浜屋敷」で目にすることができます。

昭和 59 年に、吹田市教育委員会のまとめた『吹田市内地車調査報告書（Ｉ）』では、最盛期に吹田市に 15 台のだんじりがあったことを報告しています。現存する７台を除く、８台のだんじりは、さまざまな事情から吹田を離れることになりました。

「南町だんじり」も吹田を離れただんじりの一台です。

２．南町だんじりとは

今回、吹田市立博物館中牧弘允館長の協力をいただき、南町自治会の方から、だんじりの資料と写真の提供を受けることができました。

その資料によれば、江戸～大正期に南町が護持していただんじりは、大正 10 年には老朽化し、曳行が困難になりました。そこで、同年に二代目のだんじりとして、河内枚岡で所有していたものを購入したとあります。この二代目だんじりの曳行の記録は、昭和３年の昭和天皇の御大典の時と昭和６年の高浜神社正運宮祭の２回が残っています。

なかでも昭和６年の正遷宮祭の際には 10 月 14 日から 16 日の 3 日間に渡り、配電線を長い竿で支え上げながらの威風堂々の曳行は地元氏子等の目を惹いたものであったと伝わっています。

しかし、戦後になり曳行が困難となり、昭和 38 年、原野農業博物館へ寄贈することとなりました。

掲示板に転用された初代の
「南町だんじり」
（写真提供：南町自治会）

二代目のだんじりの御幣。
昭和６年という紀年銘がみられる。
（資料：原野農芸博物館蔵）

第２章　被災から復興まで

平成 22 年の集中豪雨で被災した直後、文化財レスキューに関して多方面の協力がありました。そのなかの一つである、京都造形芸術大学の大学生・大学院生が行ってきた活動を紹介します。京都造形芸術大学では、平成 23 年から博物館機能回復に重点をおいた復興支援活動を行ってきました。復興支援活動は被災資料のクリーニングから始まり、収蔵庫整理、台帳照合、展示にむけた調査、復興記念展示の立案、展示作業と続きます。

１．文化財レスキュー

原野農芸博物館は登録博物館ですが、私立博物館であるために基本的には行政や公的機関からの支援はありません。文化財レスキューには外部からの協力体制が必要不可欠でした。被災直後の 10 月 31 日には、島内外から約 50 名のボランティアの人たちの協力を得、本館内の土砂を除去しました。

復興に際しては島内の博物館関係者をはじめ、鹿児島民具学会や沖縄民俗学会、日本民具学会など、多方面からの協力がありました。道路や海に流されてしまった資料は、奄美市立奄美博物館によって回収され、保管されています。

２．大学生による復興支援

京都造形芸術大学では、大学院生を中心として平成 23 年から 26 年まで、4 年間にわたり復興支援活動をおこなってきました。活動の目標を博物館機能の回復・再開において、

現存資料の確認と照合、クリーニング等資料の保存処置、展示再開にむけた調査、展示・ワークショップの立案等の各活動を実施してきました。

最初の 2 年間は、被災資料レスキューの観点で活動にあたりました。救出された資料のなかには、乾燥が十分でなくカビが生えてしまったものもあります。そのような資料は、泥が付着したままの資料などとあわせて水洗クリーニングを実施しました。

また、収蔵庫の壁や棚を水拭きし、除菌のためのアルコール拭きを行い、収蔵場所を確保しました。新たに確保した収蔵スペースにクリーニング済の資料を移動させて、資料台帳に照らし合わせながら、残存している資料の確認作業を行ないました。

3 年目からは、保存修復活動と並行して、展示活動も進めました。展示は、奄美大島で日常的に使われている「チヂン」というクサビ式太鼓に焦点を当て、アジアや奄美群島との比較をテーマに行うことになりました。その展示に反映させるために島内のフィールドワークを実施しました。

展示構成やレイアウト、チラシ・ポスターデザインは、デザイン専攻の大学院生が担当し、平成 25 年 12 月の復興記念展に至りました。

３．被災しただんじりの資料化

押し潰されただんじりは、部材ごとに解体して一時保管されていました。平成 25 年度より、京都造形芸術大学歴史遺産学科の学部生によって、だんじりの整理作業が行われてきました。

被災しただんじりが修復され、再びその雄姿を見ることができるように、彫物と構成部材とをそれぞれ整理し、クリーニングを行い、収蔵庫に区画立てて収蔵することを目的とした活動です。現地へ赴き、クリーニング作業と彫物分類作業、台帳作成を実施しました。

解体されただんじり部材は、土呂幕など下の部材ほど土に埋もれていたため、泥の付着が著しい状態でした。それらの部材には泥を水で洗い落すクリーニングを実施しました。

細かい埃が付着している彫物や、水洗い作業が難しい彫物については、ブラシを使った乾式クリーニングを実施しました。クリーニングを終えた部材は自然乾燥させたのち、収蔵庫に運び入れました。

収蔵庫へ運ばれた部材は、資料カードを取りつけて、一つ一つの破片の部位を特定する作業を進めます。破片に分かれてしまった部材同士の関連づけも行いました。分類した資料は写真撮影を行い、台帳上でも確認できるようにしました。

一連の整理作業の結果、バラバラになってしまった“彫物”を“資料”として整理できたことで、今回の研究資料としての活用につながりました。

復興支援活動を振り返って

平成 25 年、大学院修士課程２年目の夏、僕は期待と不安を抱え奄美大島へ向かった。奄美大島という特異な環境で、デザイナーとして何が出来るのか、そこにはどんな出会いがあるのか、そんなことを僕は空の上で考えていた。その約半年後、６回の奄美大島滞在を経て、原野農芸博物館は無事にリニューアルオープンを迎える。僕がその少年に出会ったのは、その２日前の日であった。

民俗調査、被災資料のクリーニング、展示計画、グラフィックデザインなどの作業を行う中で、僕達は一つの提案を行なった。それが現地小中学生とのワークショップであった。博物館という非日常的な場所を地域住民にとって日常的な場所とする為に、今後世代間交流が必要となる小中学生をターゲットとし、博物館の展示作品の一部を子ども達の手でつくることで、記録だけでなく記憶に残るものを制作するというものであった。ワークショップの内容は、壁面に自らの手で色を重ねていき、奄美大島の地図をつくるというものであった。はじめは緊張していた小中学生も、「美術の授業は一番楽しんだ子が 100 点です！」という言葉をかけると、楽しむことに必死になり、喜んで手を壁面に押し付けていった。

このワークショップの後、子どもたちと別れる間際に僕は将来について少年に質問をした。彼は高校になったら島を離れ、大学へ進学したあと島に戻ってくると答えた。続けてそれは何故か問うと、彼は「この島が好きだから」と答えた。

次世代の担い手がいないと嘆き、島離れが進む若い世代を問題視する人達の声を聞き、彼らはすっかり島を好きではないのだと、僕は勘違いをしていた。奄美大島を好きになる理由はたくさんある。幼いながらも恥ずかしげを見せず、それを好きだという彼は、きっとこの奄美大島の担い手となると感じた。

道端に生えるハイビスカス、河川に光るタナガ、夜明けのショチョガマ、熱々の鶏飯、満天の星空、そして奄美大島を好きな少年。僕も奄美大島が好きになった。

（京都造形芸術大学大学院修士課程修了　合同会社 ROCA 代表　中島敦貴）

ワークショップ風景（写真中央　著者）

手形でつくった奄美地図

フォーラム「小松源助から探る」報告

被災しただんじりの資料化まで

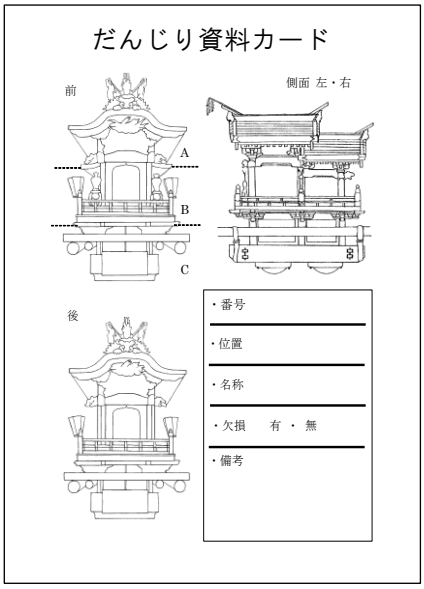
京都造形芸術大学　伊達仁美

原野農芸博物館は、平成 22 年 10 月 20 日の集中豪雨で、裏山からの土石流により壊滅的な被害を受けました。土石流は、展示室や収蔵庫を押しつぶし、展示資料や収蔵資料は土石流とともに流され、数トンもあるだんじりでさえ土砂によって押し上げられた状態でした。なかには、海にまで流された資料もあります。被災レスキューには、ボランティアの人たちの協力や、島内の博物館関係者をはじめ、鹿児島民具学会や沖縄民俗学会、日本民具学会など、多方面の協力がありました。今回は、その中の一つである京都造形芸術大学の大学生・院生が行った活動を中心に紹介します。

本学大学院では、研究系と表現系の教員と院生がそれぞれの専門の領域を生かしながら一つの目標を達成する「研究科合同演習(領域横断型)」と、院生が自主的に申請する「大学院研究助成金」を利用して、復興支援活動を展開してきました。活動の目標を「博物館機能の回復」におき、現存資料の確認と照合、資料の保存処置ならびに整理作業、展示立案を行ってきました。最初の 2 年間は保存修復を専攻している院生が資料のクリーニングや防錆等の保存処置、現存資料と台帳の照合とラベルの付与、資料の移動等の整理作業を中心に行いました。3 年目からは、それらの作業と並行してデザイン系の院生が展示計画を担当し、展示に反映させるために島内各地区で行われる豊年祭の見学や島内のフィールドワーク、小中学生との展示ワークショップを実施しました。それらの活動の成果として、平成 25 年 12 月に「復興記念展“クサビ式締め太鼓ー奄美とアジアー”」を開催しました。クサビ式締め太鼓とは、革を絞めるために「くさび」を用いる太鼓のことで、奄美大島ではチヂンと呼ばれ、そこに暮らす人びとにとっては身近な楽器です。その形状は、海を隔てた東南アジアの太鼓とも共通点があり、実物資料や映像資料で紹介しました。

平成 25 年度から、学部生が大学保護者会の支援する「蒼山会研究助成金」を得て、だんじりの部材整理作業を行いました。被災しただんじりが修復され、再びその雄姿を見ることができるように、一つ一つの破片の部位を特定し、部材ごとに整理してゆく活動です。被災しただんじりは、土砂によって展示室の一方に押しやられ、柱が折れて屋根が落ち込み、下半分が泥に埋もれた状態でした。土呂幕などの下の部材ほど、土に埋もれていたため泥の付着が著しく、泥で覆わ

れた部材は水洗クリーニングを実施しました。水洗が難しい部材については、ブラシを使った乾式クリーニングを実施しました。収蔵庫は水拭き後、除菌・防カビ処理としてアルコール拭きを行い、クリーニングを終えた部材を運び入れました。運び入れた部材を写真撮影し、整理用タグを付けて一覧表を作成しました。破損によって複数に分かれてしまった部材は、わかる限り枝番を付与し、部材同士の関連付けを行いました。一連の整理作業の結果、バラバラになってしまった彫物を資料として整理できたことで、今回の研究資料としての活用につながります。



しかし、だんじりのすべての部材が整理できたわけではなく、かつての壮大なだんじりを物語る大屋根や小屋根、コマなどは未だ手つかずの状態です。あの被災からせっかく救出されただんじりであり、そのためにも、今後も資料化に向けての活動を継続していく必要があります。

水洗クリーニング

だんじり部材の整理作業

京都造形芸術大学の復興支援

学生が大学に申請し、自主的に行った活動

- ○ 2011 年度　大学院研究制作助成金　竹村祥子、橋本悠、田原みほり、溝辺悠介、良原裕美
- ○ 2012 年度　大学院研究制作助成金　田原みほり、溝辺悠介、大石智香子、奥田美沙、永田綾奈
- ○ 2013 年度　大学院研究制作助成金　溝辺悠介、中島敦貴、永田綾奈、丸岡翔、渡辺耕太郎、伊佐治美穂、越田あさぎ

大学院の授業の一環として修士１回生を対象に、研究系と表現系の教員と学生がそれぞれの専門の領域を生かしながら一つの目標を達成する本学大学院の特徴である活動

- ○ 2011 年度　研究科合同演習(領域横断型）教員３名と大学院Ｍ１生２名
- ○ 2012 年度　オープンゼミ　教員４名と大学院Ｍ１生６名
- ○ 2013 年度　特殊演習　教員３名と大学院Ｍ１生２名

大学保護者会の支援による活動

○2013 年度～2014 年度　蒼山会研究助成金　学部生４名
「だんじりの整理作業」　茅谷友惟、梅木友香、甲斐規予子、三桝友梨香

第３章　市民と共働しただんじり調査

だんじりのクリーニング・資料化が行われたことで、新たな段階を迎えます。

これまで作業にあたってきた京都造形芸術大学の学生と、大東市立歴史民俗資料館で、市内の文化財について調査や展示をしてきた市民学芸員が共働し、だんじりの調査がはじまりました。

学生と市民学芸員は、講義や実習を経て、大東市内のだんじり調査を分析し、その成果の展示としてまとめました。

■講義１・２（6 月 22 日）

・原野農芸博物館のだんじりについて、京都造形芸術大学の学生が被災からの経過を報告しました。

・企画展「大東のだんじり」における市民学芸員活動について説明しました。

・学芸員より「だんじり」についての基礎的な講義を行いました。

■講義３（7 月 13 日）

・小松源助について、大東市内在住の西俊三さんよりお話を伺いました。

・今後の調査の進め方について試案を示すとともに、意見交流を行いました。

■実習１～３（8 月 24・31 日）

・文化財の取扱いの基礎知識を再確認しました。

・原野農芸博物館所蔵だんじりをクリーニングしました。

■実測調査１～５（9 月 8～12 日）

・調書の作成方法、注意点について京都造形芸術大学伊達仁美教授よりレクチャーを受けました。

・調書に添付する写真の撮影を行いました。

・調書に添付する図面は、写真をトレースして作成しました。

■調査方法確認（10 月 5 日）

・市内の調査方法について、撮影場所、名称等について確認しました。

■まつり撮影（10 月 12・19・24 日）

・市内 32 台のだんじりについて、写真撮影と調書を作成しました。

■調査報告・分析（11 月 16 日）

・市内での調査結果について報告し、各自の調査について、写真データと整合性をとりました。

・市内 32 台について、同じ部材ごとにならべ、相違点を調べました。

■第 1 回展示会議（11 月 23 日）

・京都造形芸術大学大野木啓人教授より、展示について基礎的な講義を受けました。

・実行委員会メンバーと展示について意見交換を行いました。

■展示打合せ（12 月 6 日・1 月 11 日）

・11 月 23 日の会議を受け、展示の方向性、進め方について検討しました。

・できあがった展示パネル・映像について、意見交換の場をもちました。

■第２回展示会議（1 月 18 日）

・1 月 11 日の意見を受け修正した展示パネル・映像について、実行委員会も交えて意見交換をしました。

■展示準備（2 月 4～6 日）

・資料の移動、パネルの貼付等の展示設営を行いました。

市民学芸員とだんじり事業

市民学芸員とは、大東市立歴史民俗資料館において、より豊かで多彩な博物館活動を行うための専門スタッフです。平成 21 年度に実施した「市民学芸員講座」を経て、平成 22 年に第１期生として誕生しました。学芸員とともに、神社の絵馬を調査し、自らが選んだ絵馬のキャプションを書き、展示をした特別展『神社探訪・絵馬案内』。また、市民学芸員自らが「石造物」「寺院」「樹木」などテーマを設定し、調査、研究、展示をした市民学芸員展「こんな大東み～つけた！」。展示だけでなく、研修や見学会、子ども向け事業の企画・実施など実にさまざまな活動を行ってきました。

平成 25 年度には第２回「市民学芸員講座」が開講され、第２期生が誕生し、総勢 21 名となりました。

第１・２期生がともに活動するはじめての場が、今回のだんじり事業となりました。

今回の事業に参加した感想をパネルとして展示しました。ここに、その文章を掲載します。

【だんじりの町、大東】

大東は、だんじりの町です。市内には 34 台のだんじりがあり、祭では 32 台が曳行されています。

だんじりの見所は、何と言ってもお囃子に合せて法被姿の若者によって、荘厳かつ勇荘に曳行される姿にありますが、もう一つ大きな見所があります。それはだんじりを飾る正面や側面に施された、ケヤキから彫出された彫物であり、更には、贅を凝らして織り上げられた飾幕です。

彫物は、「鳳凰」、「唐獅子」、「麒麟」と言った想像上の動物や、「昔話」などの物語への場面が彫出されています。

この中には、当時の著名な彫師によるものなど、地区の人々の神に奉納されるだんじりへの熱い思いと、彫師の匠の技が一体となった、誠に見事な彫物で飾り付けられており、優れた芸術作品です。毎年、祭では各地区の広場に数台のだんじりが展示されますので、多くの皆様にご覧いただき、だんじりの更なる魅力に触れていただきたいと思います。　（浅野純郎）

【情熱と祈り】

子どものころから見慣れただんじりだが、今回の調査で見事な彫刻に、改めて感動した。

正面の上部は、恐ろしい顔の獅噛。その下の車板は、彫物の中心となる神獣の青龍。横の枡合には唐獅子。その他、麒麟、虎、鷲、源平合戦の武者など、力強い彫刻で武装した大きなだんじりだ。

鉦や太鼓の祭囃子、勇ましい掛け声と、若人のほとばしるエネルギーで、疫病神を村から撃退してきた歴史が、瞼にうかんでくる。だんじりには、彫物師の技と情熱、村人たちの豊作祈願と感謝の祈りが込められていた。（上野繁）

【「大東のだんじり」曳行から】

大東市内で 32 台が曳行されている中で、野崎参道商店街に 9 基が勢揃いするのを待ち受け、地域の歴史や特徴を現わすため鉦や太鼓とお囃子で競い合い、参道が一杯になった。

事前に、資料館で数回教えていただいた要点に基づき、京都造形芸術大学の学生さんと一緒に調査を始めかけたが、参道一杯の人々で混雑する中で、やっと中垣内地車保存会の「だんじり」に辿り着いた。鉦や太鼓と囃子言葉が腹に響き圧倒され、調査を忘れそうになった。

彫物や錺金具から、屋根の獅噛、その下の龍や鳳凰、麒麟、唐獅子、龍。木鼻の獅子、象、獏、懸魚に鷲と猿、桁陰しに松と鶴、高覧に物語があらわされているようだった。

協力していただいた方には誠に申し訳ないが、麒麟のひづめと龍のつめの区分け、象と獏の区分けがしにくく、僅かな時間では、十分調べることができなかった、前もって地域保存会へ出向き聞きとるべきだったと、大いに反省するところでした。（氏原稔夫）

【だんじりを見る楽しさ】

だんじりは今まで関わる事も積極的に見に行く事もありませんでした。

今回講義を受けさせて頂き、江戸時代からの古い歴史があり、獅噛を初め多くの部材で成り立ち、奥深いものである事を勉強しました。

また十月にだんじりの彫物調査で、立派なだんじりと地元の方々の勇ましい姿を傍で見る事ができました。だんじりには、鳳凰、鷲、龍、獅子、麒麟等複雑に彫刻されていて、地区毎に見ていくと、向きや配置など違ったおもしろさがあり興味深いです。

だんじりを見る楽しさを発見しました。これからは、ゆっくりと見られた事がない方に、彫物のおもしろさを少しでもお伝えしたいです。（岡部久美子）

【小松源助の彫物】

彫物をクリーニングして作られて数十年のほこりと月日を重ね彫刻が真黒だったのが一筆、一筆ほこりを落とし洗っていくと、木の地が表れ所々彩色が残っており、今にもおそいかかってきそうな龍の目と三本爪、ウロコの一ツ一ツまで彫られ彫物師の息遣いまで聞こえてきそうな程である。だんじりに水と深い関係の龍が正面に飾られ、秋祭りの五穀豊穣に人々の願い感謝と喜びが溢れ出してくる。

今までは、立派な彫物だなぁとみていたのが、しっかり観察する様になり市内のだんじりを見て歩く楽しみも増した。諸福天満宮では境内に幼稚園児用のだんじりも並び、園児が宮司さんからお祓いを受けて満面の笑みでした。地元の人達がだんじり祭りを守り、育て次の世代に伝えて行く日本の伝統を見る事が出来ました。（黒川喜和子）

【だんじりの調査】

祭りの日にだんじりの彫物の調査に行きました。造形大の学生さんと組んで一台のだんじりの四面の彫物について調査票に記入し、写真をとりました。

人出も多く、だんじりが休憩している間にすばやくせねばならず、又麒麟、獅子、獏、等の区別がよくわからず学生さんに頼ってしまいがちでした。

今回、だんじりのクリーニング、計測等の時にも参加しましたが、その時の活動の意図を汲んだ上で知識や写真の撮り方や描写力が必要だと感じました。いろいろな作業を経験できたし、それぞれが興味深かったです。

来期はだんじりの彫物でも物語の部分が楽しそうなので調べてみたくなりました。（田里孝子）

【展示テーマ「だんじり」について】

講座に参加でき、感じたことは市内にこんなに沢山、地車があり、守られてきた事に大東市民の力と情熱を知りました。現在３２基、活躍しているとの事、歴史が忍ばれます。

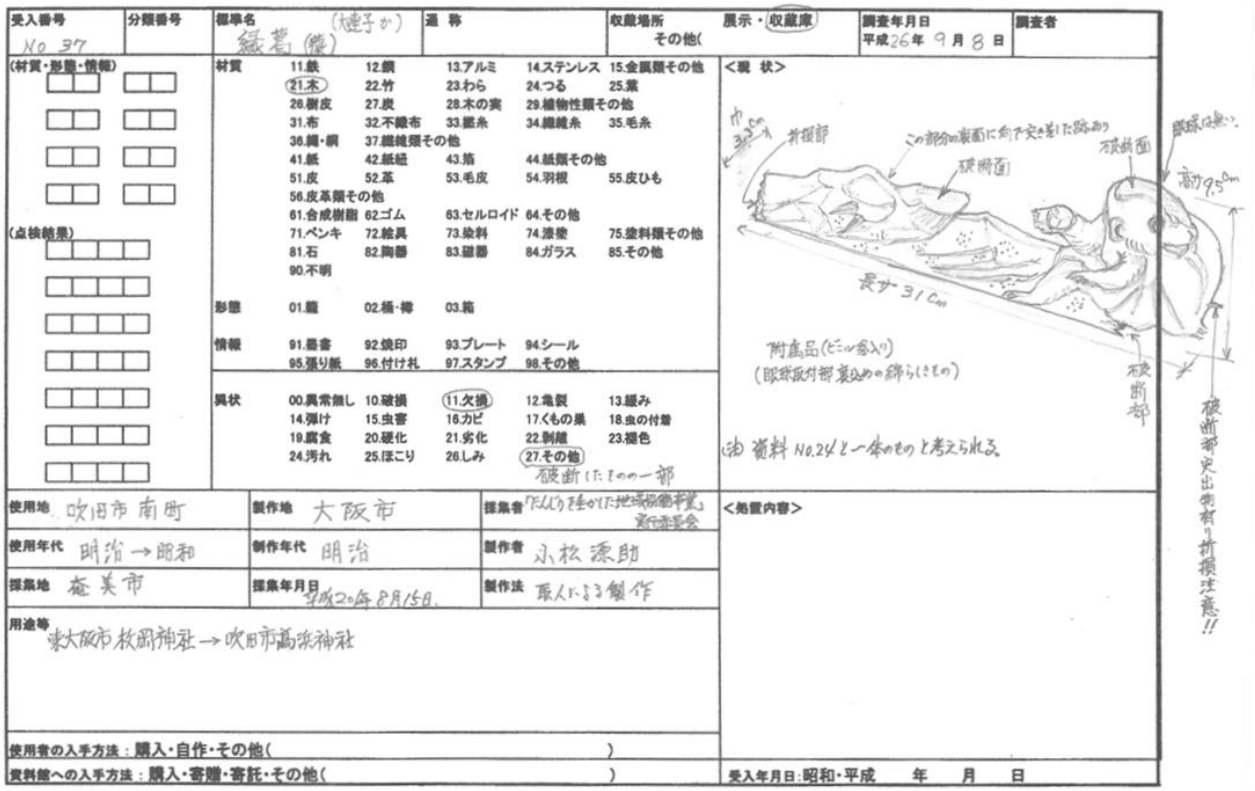
地車の彫り物清掃に関われたことや、龍の部材をスケッチしたこと。（途中まででしたが）日常ではありえない体験が出来ましたこと、感謝です。（為則照子）

【だんじりの彫物調査にかかわったこと】

展示テーマ「だんじり」について何度かの講座に参加させていただきました。フィールドワークの部分では参加できないことが多かったのですが、いろいろなことを知る機会に恵まれました。なかでも奄美大島の博物館で災害にあって破壊された地車の部材を清掃したり、調査し記録する作業に参加できたことはても興味深いことでした。雑多な破片となったものを一つひとつ埃を落おとし、よく絞ったウェスできれいにぬぐいますが、扱いにはとても気を使います。印象に残っているのは猿の彫り物です。水拭きで頭頂部をぬぐっていたとき、ウェスが真っ黒になりました、そこではじめて気付いたのですが頭部を黒く墨かなんかで塗ってあるようなのです。あわてて擦ることをやめました。

調査カードを作るとき、その彫り物を選びました。部材の寸法を測り、形状をスケッチして調査カードに記録するのです。このような作業に参加できたことをうれしく思っています。

（為則泰明）



【だんじり調査に参加して】

たんじりが末広公園に勢ぞろいしていた。壮観だった。調査対象の下野地区のだんじりは直ぐに見つかった。世話人の長老らしい人に撮影許可を求めると、快く許しを得た。下野地区のだんじりについて質問すると、造られたのは、明治時代、４～５年前に大修理されたようだ。

早速、写真撮影にかかる。当日は天気が良く陰になる部分も多く、飾り付けもあり、写真の出来が心配だった。目の前にだんじりを見て、その立派さに驚いた。想像していた以上に大きかった。全体の風格に加え、精細な彫刻、これは芸術作品だ。又、揃いの法被でだんじりに関わる人達の熱を感じる。（友田晴通）

【だんじり調査に参加して】

調査に参加して、大東市には 30 以上のだんじりがある事をしりました。そして地域の方々のだんじりに対する思い入れ、だんじりを維持していくのには、大変な労力と資金ならびに地域の協力が必要だと言うことが解りました。

保存会や青年団の方々のお話を聞いて、皆さんの地域愛がひしひしと感じられ、心があったかくなりました。何十年かに一度の専門業者による灰汁での洗浄、「洗い」では、色が判らなかった牡丹の花の色が、生花のような淡いピンクに蘇ったと聞き、驚きました。

知らない事ばかりで、とても勉強になりました。それぞれの保存会の方に感謝いたします。以前はだんじりの華やかさだけを見て浮かれていたけれど、今後はみなさんのご苦労を加味して楽しみたいと思います。（中下志津子）

【動く彫刻「だんじり」】

今回、江ノ口北・深野北・野崎第二の「だんじり」を調査した。どの保存会も、伝統行事を守っていこうとする意気込みが感じられ、街中を曳行している雄姿は感動を覚える。

だんじりには、屋根には獅噛、その下には鳳凰、麒麟や獅子などが配置されるのが基本とされている。しかし、それがどう具体的に配置されているのか見分けることは難しい。しかもだんじりによって、それも様々である。当然、そこには彫物師の思いもある。それらを少しでも明らかにできれば、動く彫刻「だんじり」として、見方も違ってくるように思える。（中村義之）

【私にとってのだんじり入門編】

だんじり全般の予備知識学習で、鳥獣、草木、故事、神話などの彫物で飾られていることや、太鼓、鉦などの囃子方を乗せた曳き物で、神社の神霊は乗っていないことなど初めて知ることばかりでした。

調査でだんじりを間近で見る機会に恵まれました。あちらこちらに彫物が所狭しと飾られており、一番目立つだんじりの屋根の上にある獅子は、目がつりあがり、屋根を歯で噛み、足で押さえつけている獅噛の凄みをきかせた姿は個性的で迫力があります。

今回の調査は私にとってのだんじり入門編になることは間違いありません。　　（松井健一）

【展示レクチャーが加わっての展示】

今回は、調査やクリーニング・トレース・記録の仕方だけでなく、展示についての講義が加わり、調査から展示までの全過程を学習しての活動でした。

彫物のクリーニングでは、「現状変更につながらないように傷をつけてはいけない」、トレースでは、「付け加えたり省いたりしないように正確に描く」、記録票記入では、「間違って記録してはいけない」というプレッシャーを感じつつ、彫物を真剣に見つめました。

展示については、調べたことや分かったことを伝える心遣いの一つとして、ワクワク感のある展示の創出を自覚することになりました。

結果はともかく、本格的に展示の講義を受けての初めての取り組みです。　　（水永八十生）

フォーラム「小松源助から探る」報告

市民と共働しただんじり調査

大東市立歴史民俗資料館　武井二葉

１．はじめに

本事業において、私は博物館教育という立場から、このプロジェクトにおいて「博物館」で「人」はどのように学ぶのか、あるいは「博物館」は「地域」のなかでどのような存在に成りえるのかを考えてきました。

今回、私どもが提出した文化庁への申請書には、２つのミッションを挙げています。

１つは、人材育成の場としての博物館活動を行うこと。もう１つが、博物館を介して「地域」「市民」を結びつけることです。この二つのミッションについて、その成果と課題について考えていきたいと思います。

２．学びあう場としての博物館

（１）ねらい

これまで被災しただんじりの「資料化」に関わってきた京都造形芸術大学の学生と、市域の文化財やだんじりについて資料館と調査をしてきた市民学芸員がともに作業をするなかで、互いに学びあう場を創造するというねらいで活動を行ってきました。

（２）活動の内容

方法については、３　市民と共働しただんじり調査」の項に譲り、ここでは割愛します。

（３）課題

今年度、それぞれの場面で「学生と市民が学びあうことができました」というところには至りませんでした。この要因として、１．学生・市民学芸員・実行委員会のメンバーのアイスブレイクが充分行われていなかったこと。２．また、その結果全体的に「発話」の機会が少なく、ともすれば学芸員による知識流入型の活動のウェイトが大きかったこと。３．学生・市民学芸員それぞれの「知識」「経験」について、ヒアリング等により途中評価を行うことなく、事業を進めてしまったことがあります。

結論として、事業の初期段階で、アイスブレイクを適切に行い、その後の発話を促すこと、また「発話」の内容や「ヒアリング」等を通じて、事業が目的の通りに達成されているのかという途中評価を行うことによって、状況は改善できたものと考えます。

３．フォーラムとしてのミュージアム

（１）ねらい

博物館を介して、「地域」と「市民」を結びつけるというミッションについては、「フォーラムとしてのミュージアム」という考え方に基づいて、その活動を行ってきました。「フォーラムとしのてミュージアム」とは、一方的に展示するのではなく、さまざまな価値が提示され、議論できる場のことです。

（２）活動の内容

まず、大東市在住でだんじり愛好家の西俊三さんに、これまで調べてこられただんじりの写真やデータを、市民学芸員・学生を対象とした講義で紹介していただきました。そのなかで、これを学問の場で議論していくには、どうしたらいいか、ということの検討を始めました。

そこで、仏教美術史を専門とする大阪経済大学の長田寛康先生や奈良大学の栗田美由紀先生に相談し、アドバイスを得ました。例えば、飛鳥・奈良時代から制作されている仏像と比べるとだんじりが江戸時代という、短い期間に制作されたもので、様式的な特徴はだしにくいということ。また、マクロとミクロでだんじりを測る「物差し」をつくることで、だんじりの彫物についての議論が可能になっていくというという助言をいただきました。

そこで、調査を行う際に「ミクロ」という点においては、だんじりの彫物を専門にされている木下彫刻工芸さんに調査時に同道していただきました。その際に「大まかには同じ」であるが「細部には違いが見られる」という回答があり、例えば、牡丹の葉脈の表現が異なると指摘を受けました。

調査時には、中之町地車保存会の方に調査に協力いただくだけでなく、原野農芸博物館のだんじりを見ていただきました。特に、中之町の方からは、調査の内容ではなく、博物館と地域との付き合い方、信頼関係の構築についてご意見いただきました。

そして、祭り当日の調査で、各保存会の方が市民学芸員にお話しいただいたことも、展示を考える上での参考となりました。

（３）成果と課題

本事業では、市民学芸員と「調査」をつくっていく段階で、多様な「知識」や「経験」を反映させてきました。成果として目に見える形になっているのは、「彫物の構図調査」ですが、「愛好家」や「専門家」「現職の彫刻師」の「知識」や「経験」をつないで調査をつくり、「市民学芸員」や「学生」とともに「地域」と「博物館」をつなぐことができたと考えます。

市民学芸員・学生に対し、さまざまな価値を提示し、議論をしながら「調査」「展示」を行ってきたという点においても、「地域」との双方向のやりとりという点においても「フォーラムとしてのミュージアム」であったと考えます。

４．まとめ

「仏像」と違って「だんじり」は、これまで彫刻史の研究の対象になっていません。それゆえに、「調査・研究の方法」も模索の段階です。「〇〇風」「らしい」「伝」と言われているものに対して、どのようにアプローチすれば「論拠」を得られるのか、日々考えているところです。

その結果、市民学芸員・学生の人材育成という場面において、「答え」が見えない迷いが現れ、混乱が生じたことは否めません。一方で、調査・研究方法が定まっていないことは、だんじりが「フォーラムとしてのミュージアム」をつくりやすい素材だったと考えます。

今後は、調査・研究から、展示・教育普及に軸足をシフトし、博物館を核にして「地域」「市民」「来館者」「来訪者」が結びつく、博物館活動を展開していこうと考えます。

第４章　だんじりの彫物

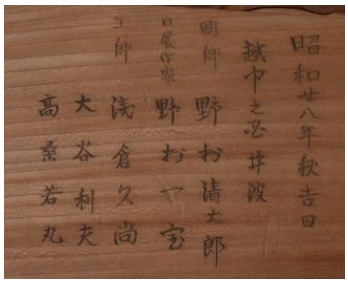
大東市内には、34 台のだんじりがありｉ、そのうち 32 台のだんじりが、現在も秋祭りで曳行されています。そのうち、彫物師などの銘が確認できたのは 10 台で、中之町地車保存会だけが原野農芸博物館所蔵だんじりと同じ「小松源助」の名前が確認できました。

また、市内 32 台、彫物の構図調査においても、中之町地車保存会だけが原野農芸博物館所蔵だんじりと構図が共通していました。

このことをふまえ、中之町地車保存会･原野農芸博物館所蔵だんじりの比較調査を行いました。

１．在銘だんじりの調査

平成 25 年度のだんじり調査により、彫物師の銘が入ったものが数台確認されました。そこで資料館では何が書かれているか詳しく調べることと、他に銘があるだんじりを調べるため、市内在住のだんじり研究家の西俊三さんによる教示のもと、市内だんじりを改めて調査しました。その結果、10 台確認出来、それぞれ銘文箇所の写真撮影と翻刻作業を行いました。



東之町銘

（1）写真撮影と翻刻対象のだんじり

銘が確認されたのは、東之町、中之町、辻之町、南新田･元町、大箇、朋来、御領、東諸福、新田、太子田の 10 台で、そのうち朋来地車保存会所蔵のだんじりは、自治会長の山中治氏により作成されたことが知られており、撮影・翻刻対象は残りの 9 台としました（表 1 参照）。

辻之町銘

（2）銘文の翻刻から

前出の 9 台の銘文から、だんじりの彫物師名が判明しました。それぞれ、東之町は「野村清太郎･一宝」、中之町は「小松源助」、辻之町は「小松福太郎改源助」、南新田・元町は「福太郎」、御領は「西岡又兵衛」、東諸福は「柳原清兵衛」、新田は「西岡弥

南新田・元町銘

三郎正光」、太子田は「小林源□」と判明しました。しかし、大箇のだんじりには「大和書」と墨書きがありましたが、他の墨書きが不明なため、「大和」が彫物師名であると判断が出来ませんでした。

御領銘

（3）市内だんじりと原野農芸博物館蔵のだんじりの関係性

一方、原野農芸博物館蔵が所蔵するだんじりには、「全備彫工小松源助／浪花本町福光亟」という銘が刻まれています。この銘から、小松源助が彫物を担当したことが判明します[ii]。

東諸福銘

では、市内だんじりと原野農芸博物館蔵の関係性については、どのようなことが言えるでしょうか。市内で原野農芸博物館蔵と共通する人物名は、中之町「小松源助」と辻之町「小松福太郎改源助」の 2 つが挙げられます。しかし、管見の限りでは、大東市内外の小松源助関係史料には、「小松福太郎改源助」が小松源助と同一人物であることを示すものはありません。よって、銘文から中之町と原野農芸博物館蔵が小松源助の作と考えられます。

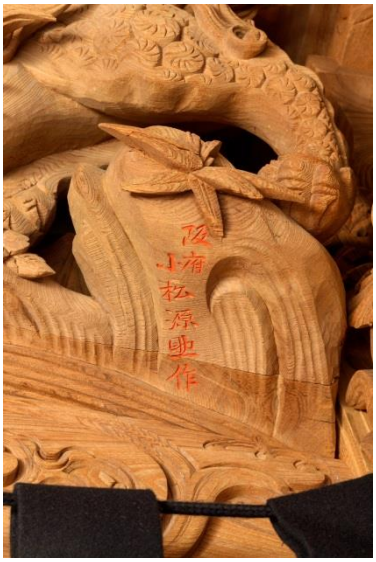
新田銘

（4）小結

調査の結果、中之町と原野農芸博物館蔵だんじりが小松源助作であることが判明しましたが、小松源助並びに小松一門と呼ばれる彫物師の集団について、古文書を始めとする文献史料が乏しく、小松源助研究において学術的・論理的議論がなされていないように思われます。太平洋戦争時の空襲により、史料が焼失したのが大きな原因と考えられます。しかし、四條畷市雁屋に残る「彫物請負定約書」といった、大阪周辺地域に残る小松源助が記した史料の発見・調査が、今後の小松源助研究をより発展させると考えます。今後は、こういった史料の発見・調査を行っていければと思います。

（大畑博嗣）

太子田銘



中之町銘

原野農芸博物館蔵銘

（表 1）大東市内在銘だんじり一覧（平成 26 年大東市立歴史民俗資料館調べ）

No	団体名	彫物師名	年月日
1	東之町	野村清太郎･一宝	昭和 28 年秋吉日
3	中之町	阪府　小松源助作	不明
5	辻之町	小松福太郎改源助	明治 3 年 5 月（彫物作直し）
9	南新田･元町	福太郎	不明
18	大箇	（大和）	不明
27	御領	西岡又兵衛	不明
28	東諸福	柳原清兵衛	不明
31	新田	西岡彌三郎正光	不明
32	太子田	小林源□	不明

ⅰ子どもだんじり・神輿は含まず。平成 25 年度歴史民俗資料館調べ
ⅱ先行研究や由緒書などでは、「小松源助福光」作としているものがあるが、この銘は「すべての製作を小松源助が手掛けたことを、浪花本町の福光という人物が鑑定して証明した」という意味を示す極書きというもので、小松源助自身が刻んだものではなく、小松源助と「福光」を別人としたほうがよい。

２．市民学芸員による構図調査

この調査では、市民学芸員の発案により、市内 32 台のだんじりについて、彫物における構図の比較を行いました。特に、虹梁上の彫物を対象として、その変化を写真撮影と調査票への記入によって確認しました。その結果、構図という点においては、中之町地車保存会所蔵・原野農芸博物館所蔵の両だんじりにおいて、極めて高い類似性が認められました。

（１）調査対象

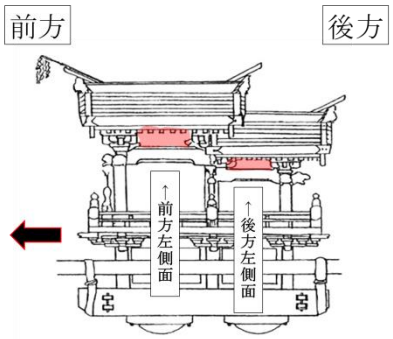
右記の図の通り、前面、後面、前方右側面・左側面、後方右側面・左側面の計６ヶ所の虹梁上彫物を調査しました。

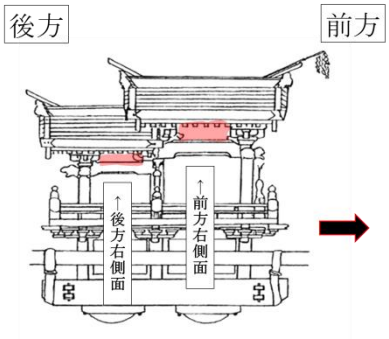
だんじり・山車の部材名称は、「建築物」と違い、辞書等による整理がなされていません。出典により「虹梁型頭貫上」と表記されるものもあれば、「枡合」と表記されるものもあります。今回は、一般にわかりやすくするため、下記の通り、前、後、左、右を使用し、彫物の位置を示しました。

（２）分類方法

表２の通り、種別・身体（頭部）の向き・型により、対象となる部材を分類しました。

まず、身体（頭部）が右を向いているもの（A）と、左を向いているもの（B）に分類します。さらに、その姿勢から後肢を蹴り上げるもの（Ⅰ）、後肢を地面に接するもの（Ⅱ）、座っているもの（Ⅲ）、転倒しているもの（Ⅳ）に分けました。そして、ひとつの部材に彫られている意匠を、この組み合わせで表現しました。左側の個体から順に表記しています。





例えば、図１では、図像を正面からみて、左側の個体は、身体を左に向けており（B）、後肢を蹴り上げている（Ⅰ）。右側の個体は、身体を左に向けており（B）、地面に接している（Ⅱ）ので、＝（BⅠ）（BⅡ）型と表記します。

（図１）分類例

（表２）分類方法一覧

種別	獅子	麒麟	龍	その他
体の向き ※龍は頭部の向き	右向き＝A	左向き＝B		
型	Ⅰ．後肢を蹴り上げる	Ⅱ．後肢は地面に接する	Ⅲ．座っている	Ⅳ．地面に背を接し、転倒している

（３）調査成果

前面では、市内 32 台のうち、彫物の意匠が確定できたのは 31 台です。そのうち、29 台に「龍」が彫られていました。後面では、市内 32 台のうち、彫物の意匠が確定できたのは 30 台です。そのうち、24 台に「獅子」が彫られていました。

前方左側面は市内 32 台のうち、彫物の意匠が確定できたのは 30 台です。そのうち、24 台に

「麒麟」が彫られていました。

前方右側面では、市内 32 台のうち、彫物の意匠が確定できたのは 31 台です。そのうち、24 台に「麒麟」が彫られていました。

後方左側面では、市内 32 台のうち、彫物の意匠が確定できたのは 29 台です。そのうち、20 台に「獅子」が彫られていました。

後方右側面では、市内 32 台のうち、彫物の意匠が確定できたのは 28 台です。そのうち、20 台に「獅子」が彫られていました。

これを更に身体の向き・型を含めて分類し、各だんじりごとにまとめると表３のようになります。表からは、原野および中之町のだんじりが構図が共通していることがわかります。

（表３）大東市内だんじり構図一覧表

	名称	前面	後面	前方左側面	前方右側面	後方左側面	後方右側面
	原野	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅡ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅡ）	（ＡⅠ）（ＢⅠ）
3	中之町	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅡ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅡ）	（ＡⅠ）（ＢⅠ）
1	東之町	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	その他	その他	その他	その他
2	北之町	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅡ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅡ）（ＢⅠ）	（ＡⅡ）（ＢⅡ）
4	四條之町	Ａ	その他	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	その他	その他
5	辻之町	Ａ	（ＢⅠ）（ＢⅡ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅢ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅡ）
6	深野北	Ｂ	その他	その他	その他	その他	その他
7	平野屋	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）
8	谷川	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）
9	南新田･元町	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）
10	野崎第一	Ａ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅣ）（ＡⅠ）	（ＢⅣ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）
11	野崎第二	Ｂ	その他	その他	その他	不明	不明
12	寺川	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）
13	中垣内	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅡ）（ＢⅡ）	（ＡⅡ）（ＡⅠ）
14	龍間	不明	不明	不明	不明	不明	不明
15	西ノ口	Ａ	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅣ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	その他	その他
16	江ノ口北	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅡ）	（ＢⅡ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅡ）（ＢⅡ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）
17	江ノ口南	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	不明
18	大箇	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅡ）	（ＡⅡ）（ＡⅠ）
19	下野	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅡ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅡ）（ＢⅠ）	（ＢⅡ）（ＢⅡ）
20	押廻	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅡ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）
21	御供田	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）
22	灰塚	Ｂ	不明	その他	その他	その他	その他
23	大野	その他	その他	その他	その他	その他	その他
24	朋来	Ｂ	その他	その他	その他	その他	その他
25	氷野	Ａ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）
26	赤井	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）
27	御領	Ｂ	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	不明	（ＡⅡ）（ＡⅡ）
28	東諸福	Ｂ	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅡ）（ＢⅡ）	（ＡⅡ）（ＡⅠ）
29	西諸福	Ｂ	（ＢⅡ）（ＢⅠ）	その他	その他	（ＢⅡ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅡ）
30	新田	Ａ	その他	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＡⅠ）（ＡⅠ）	（ＢⅠ）	（ＡⅠ）
31	新田	その他	（ＡⅢ）（ＢⅢ）	（ＡⅠ）（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）（ＢⅠ）	その他	その他
32	太子田	Ｂ	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	（ＢⅠ）（ＢⅠ）	その他	その他

フォーラム「小松源助から探る」報告

「小松源助」だんじりの比較調査

大東市立歴史民俗資料館　溝辺悠介

中之町彫物撮影

比較調査では、北条神社中之町のだんじり彫物と原野農芸博物館のだんじり彫物の構図を直接比較できるように、写真トレースによる比較方法で検証しました。それぞれの彫物を同じ角度で撮影し、その写真をトレース図におこして、その構図を比べます。今回は、写真撮影環境に制限がある中之町の彫物を先に撮影し、その状態にあわせて原野農芸博物館の彫物を撮影しました。

撮影した写真からトレーシングペーパーに線を写していきます。対象が彫物であるため、写す線は基本的に谷線を拾っていきます。3 種類のロットリングペンを使用し、外形線は 0.8mm、各パーツの輪郭線を 0.5mm、細部意匠の線を 0.2mmで写していきました。

トレース図を横に並べてみると、麒麟・獅子については全体構図、顔や足など各パーツの位置関係やバランスが、ほぼ同じであることがわかります。下絵レベルでは、同じものを使用していることが明らかです。龍や獅噛は構図上、相違点がみられますが、顔の目や鼻などの比率は同じことが分かりました。（後掲の図版参照）

構図レベルでは同じといえる 2 台の彫物ですが、細部に注目すると、違いもみることができます。そのひとつとして木鼻・獏鼻の違いがあげられます。中之町の獏鼻の耳が伏せている形状に対し、原野農芸博物館の獏鼻は立っている形状です。両者に違いがみられることから、市内 32 台のだんじりで獏鼻を持っている 25 台を調べました。立った形状のものは 9 台、伏せた形状は 16 台という結果でした。なかでも御領地車の獏鼻は、耳が立った形状、伏せた形状どちらも確認できます。一般に社寺建築では、耳が垂れて肢がない場合は象鼻になりますが、伏せた形状のものについては、今後さらに検証していく必要があります。

中之町獏鼻　耳形状

原野農芸博物館獏鼻　耳形状

また、彫り方による違いも見えてきます。例えば、麒麟のうろこ表現ですが、模様（縦筋の有無）に違いがみられます。

中之町地車保存会

原野農芸博物館

彫りの深さにも違いがみられます。トレース図では、0.5mmで写す線に違いがでてきます。この違いを明らかにするために、原野農芸博物館の彫物に対して真弧を用いて断面計測を実施しました。彫り方の違いが顕著であった鬼板（獅噛）の毛並表現の断面をみてみると、渦文様の外周部分が垂直に近く彫り込まれていることがわかります。

中之町地車保存会

原野農芸博物館

鬼板の部分断面計測

真弧を用いてトレースした断面

今回は、写真トレースによる比較調査から、構図上の相違点、彫り方の違いを調べました。今後はこの調査方法をひとつの事例として、調査数を増やし、彫りの深さの違いや彫物師の特徴など、さらに細かい調査を続けていきたいと思います。

図　版

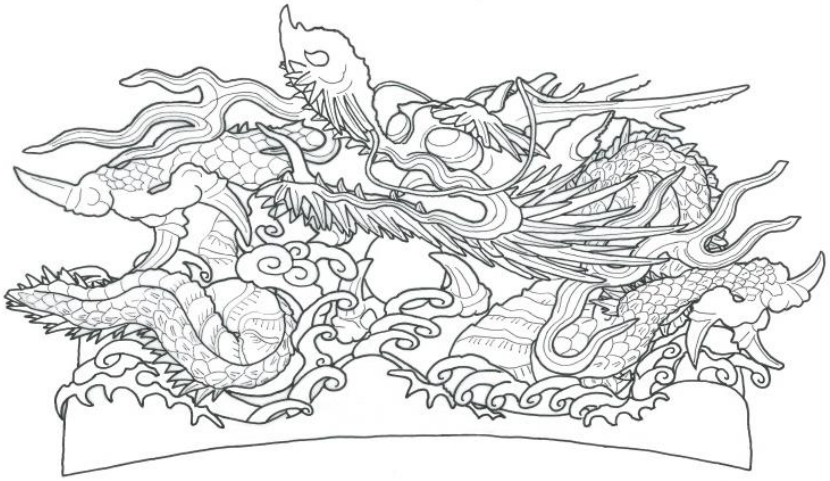
・鬼板

中之町

原野農芸

・前面

中之町



原野農芸

・前方右側面

中之町

原野農芸

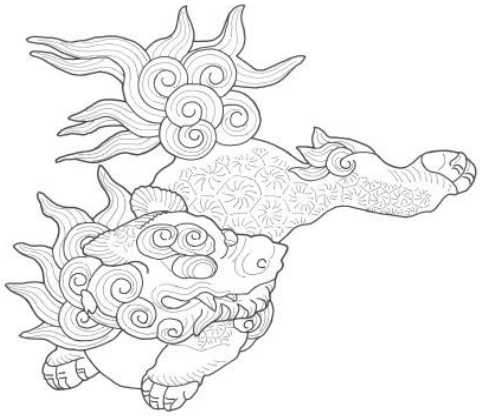
・前方左側面

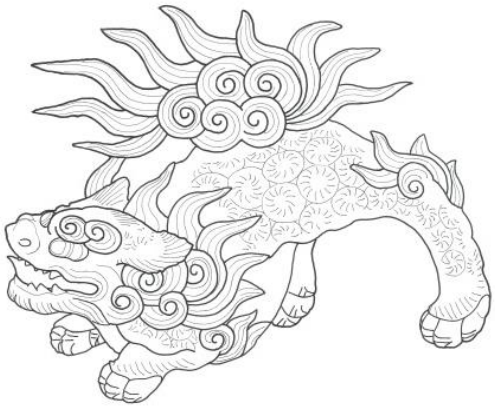
中之町

原野農芸

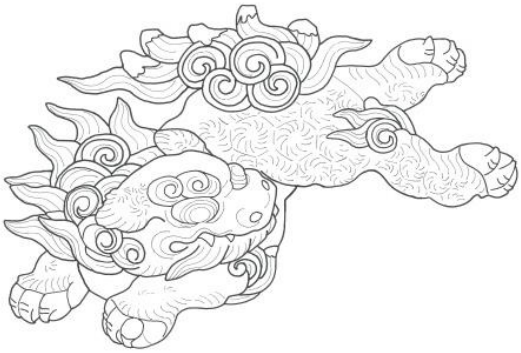
・後方左側面

中之町





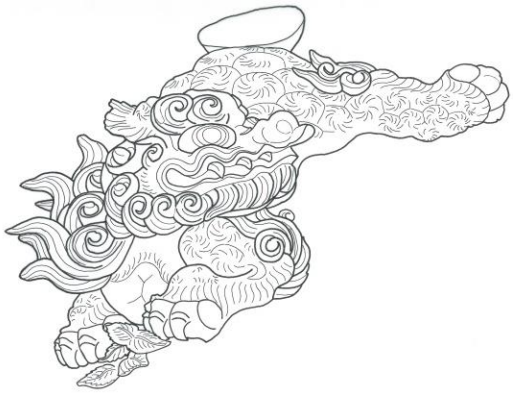
原野農芸

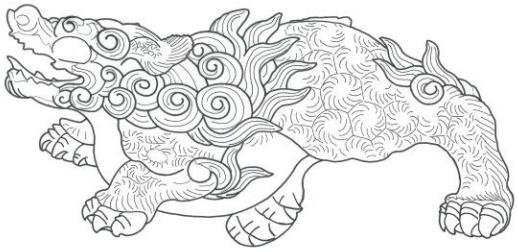


・後面

中之町

原野農芸





・獏鼻

中之町

原野農芸

・獅子鼻

中之町

原野農芸

第５章　まとめ

フォーラム「小松源助から探る」　第２部パネルセッション　平成 27 年 2 月 11 日　16:00～17:00
コーディネーター：笠井敏光
パネリスト：原野耕三、大野木啓人、伊達仁美、松井健一、茅谷友惟、武井二葉、溝辺悠介

笠井敏光：第一部での報告を踏まえて、もっと具体的なことをお話していただこうと思います。まずは、原野農芸博物館の館長さんに一言よろしくお願いします。

原野耕三： 皆さん、こんにちは。先ほどからウチの「だんじり」が話題になっていますが、笠井館長さんに「一言」話をするよう言われていますが、結論から申しますと、この場では、あまり相応しくないようですが、あまりいい印象はなく、いつも問題が多かった。苦労した思い出が先にうかびます。

私は今年 68 歳になりますが、18 歳の時です。父、先代のもとに吹田市南町自治会の役員さん数名こられ「あんた言え、あんた言え」と小声で言い合っている気配が感じられ、何かの用事か、苦情で来られた思い、それが今から考えると「だんじり」の最初の出会いになります。その後、寄贈が実現となり、東京オリンピックの年 10 月 11 日に収蔵庫落成時に自治会の有志（26 名～27 名）をご招待した際の記念写真が当館に残っています。

いくら車輪（コマ）が付いているとはいえ、これほど「あっち、こっち」に移動した「だんじり」は少ないと思う。当館が豊中で活動していた頃でも寺内地区土地区画整理事業によって園内を 2～3 回移動し、そのたびごとに収蔵庫を移設か新築する結果となり、そして移動も簡単にはいけません。大型で重量もある代物、専門職でなければ対処できず苦労した気憶しか残っていません。

笠井：伊達先生に被災状況をご覧になっての感想をお聞かせください。

伊達仁美：私が被災の状況を確認しましたのは、日本民具学会から派遣されて参りました時です。確認には、文化財保存修復学会からも一人派遣されました。文化財保存修復学会と日本民具学会とで、原野農芸博物館に対して何が出来るか、ということを調査に行ったのですが、とてもひどい状態でした。

笠井：今回、この事業は文化庁からの補助金を頂いているのです。昨年の今頃に、文化庁に申請をしたのです。このへんの状況を武井さん、どうぞ。

武井二葉：一つには、学芸員自身がこれをやってみたい、調べてみたいという思いがあったということ。つまり、この前段階として、大東市では「大東のだんじり」という展示をやっていく中で、地域の保存会の人であったり、あるいはだんじりを研究されている方だったり、いろんな方とお付き合いが出来まして、そのなかで、何か成果にまとめたいという思いが、学芸員サイドにあったのが一つです。

もう一つは、ある保存会の中に「この辺のだんじりって、彫物ええことないやろ。岸和田に比べたらあかんやろ」みたいにおっしゃる方がいて、いやいや、そんなことはないですよと。こちらにはこちらの良さがあるし、向こうには向こうの良さがあるんだと。なので、是非こっちの良さっていうのをもうちょっと人にわかるように伝えていく努力を、当館のほうでしていきたいなという思いで、申請をしました。

笠井：一番今回の仕事でいろいろやっていただいた溝辺さん。調査で苦労した点、というのがあったら。

溝辺悠介：調査でというのは、勿論今までこういうだんじりの調査は、なかなか行われてこなかったということですので、どういう調査方法であれば、何かしら分かるのかと。我々もだんじり展をやったのが2013年ですから、市内のだんじりを見て回ってまだ2年という段階でした。これからもっともっと深く追求していくというときに、じゃあどういう方法がいいかって悩んでいた時期でもあったので、本当に「試行錯誤」というような1年でした。

苦労した点、というのはいろいろあるのですけれども、特に調査だけでなくその前段階ですね。前段階が一番苦労したのかなぁと。やっぱり彫物を奄美から持って来るということや、地車庫での調査日程の調整などで、天候に左右されることが難しかったと思います。天候ですから読めないのですが、そういった中でどういう調査方法がベストか、進めて行ったらいいかというのを、試行錯誤しながらやっていったのが難しかった、と思います。

笠井：次に大野木先生にお聞きします。先ほどもご報告いただいたのですが、今回の彫物はいかがですか。

大野木啓人：一つですね、語弊があるかもしれませんが上手くやってるよという、逆に言うと上手く誤魔化している、というのがあります。これはね、実は義眼なんです。動物なり人間の彫り物が勝負なんです。僕も仮面をいっぱい作ってましたけど、仮面をやるときに、目が一番大事なんですね。目で生きるか死ぬか、くらい大きい役割を、目が持ってる訳です。実はこの小松源助さんもそうだし、いろんなだんじりにおいて目はそこを義眼で表現している訳です。これはある面ではずるいことかもしれんけど、結局あれが勝負どころになってると思っています。普通、木彫でやったら目もみんな木彫でやる訳ですよね。だけど、そこを上手く使っているのと同時に、あの目を相当この小松さんはしっかりと吟味しています。だからあれだけのものが出る、という風に思っているのです。そういう面でもまたみていただけるといいなぁと思うし、勿論目だけでなんぼ勝負したって生きた動物は出来ません。でも、あそこにあれだけの目を入れたっていうのは、すごいなという風には思いますね。

笠井：市民学芸員という立場で調査に参加された、松井さんからどうぞ、一言。

松井健一：市民学芸員として今回はだんじりの歴史とか彫物についてレクチャーを受けた訳ですね。で、今回の調査に対してそのレクチャーを受けたことが非常に役立った。例えば、私たち素人目では、龍と麒麟って区別がつかなかったんですね。ただ、レクチャーを受けたために、足のところが爪だよ、足のところが蹄だよということである程度どことなく区分け出来た。それによって、だんだん引き込まれていったというのが現状です。

笠井：続いてですね、京都造形芸術大学の茅谷さんどうぞ。

茅谷友惟：私たちは4人で作業していました。最初作業を始めた時はもう災害から3年経っていたんですが、復興に関しての作業がまだ続いている最中で、だんじりを整理するにしても彫刻を移動する場所をまず空けるために、まず新しい収蔵庫にほかの資料を移動するということですとか、だんじりのみのための作業じゃないこともお手伝いさせて頂いて、だんじりのことはもちろんなんですけれども、そういう災害からの復興の様子っていうことを、私たちは学生なので、知ることが出来たのがとても良かったなと思っています。

笠井：それでは、これから本題に入っていきたいと思います。まず、今回の調査と展示の成果について伊達先生からお願いします。

伊達：私自身は、大野木先生のように彫刻をなにかする、彫刻を調べるっていうことではありませんが、被災した民俗資料をどのように扱うか、ということについては、基本的な工程は確立するこ

とができました。しかし、大きなだんじりに関してどのように扱ったらいいかということは、本当に試行錯誤でやってまいりました。

でも、私の成果としましては、学生と一緒に出来、教育的効果があったということがすごく嬉しいと思いました。それが私の成果だと思います。

笠井：今回の調査は、ご紹介した通り、学芸員や大学の先生だけというのではなくて、市民学芸員や学生さん、それから各町会のいろいろな方のご協力で出来たのですね。それでは、続いて大野木先生にお願いします。

大野木：多分まともにちゃんと奄美にあのだんじりがあったら、あの細部まで見てなかったし、見過ごしていたかもしれないですね。被災に遭ってぐちゃぐちゃになってしまったおかげと言ったらおかしいんですけど、それで我々は近いところであれだけのものを見せてもらって、僕はすごい発見が出来たという気がします。だから、被災に遭うこと事態がいい事はないのだけど、でもむしろああいうことがきっかけで彫物の再発見が出来たんじゃないでしょうか。そういう面であれほどすごいものをもう一度元に戻したい、何とか修理をしてでも復興したいという思いがずっと持ち続けていることなんです。

笠井：では武井さん、どうですか。一年間やってみてよかったですか。

武井：市民学芸員さんとどういう風に調査をしていこうかっていうのは、当初からの悩みでした。最初は、私たち学芸員がやることの真似事みたいなことをやってもらおうかなくらいに考えていたんです。

ところが、レクチャーの中で、どういう調査をしていったらいいと思いますかという意見交換の場を持ったときに、「いくら小松源助と書かれたもの同士を見比べても、それが同じとか違うっていうのはどうやって言えるのやと。他の違うものや似たようなものがあるからこそ、特にここが似ているとか違うということが言えるんじゃないか」ということを市民学芸員からおっしゃっていただいたんですね。そこで、市内 32 台の調査ということが始まっていった訳です。

32 台の調査をした成果というのは、だんじり愛好家の方からしたら当たり前のことかもしれない。そこに麒麟がいるなんて当たり前、そこに獅子がいるなんて当たり前、すべて当たり前のことかもしれないけれども、その事実を少しずつ積み重ねていくことで、だんじりを調査するときの物差しとしていくことが重要だと思います。それが報告書となって、他の地方・博物館に行ったときに、どうなんだろうっていう比較をする物差しになります。このことが、今回の一つの成果なのかなと思います。

笠井：一般的にお祭りやだんじりが各町会にあったら、自分のところのだんじりのことはよく知っているのですね。よそのところのだんじりよりも、自分のところが一番や、と皆思っているのです。

もう一つは、今日もたくさん来られていると思いますけれども、だんじりがお好きな方はたくさんいらっしゃいます。それぞれ自分で基準を持っておられるのですが、皆が納得出来るようなそういうものが無いのですね。その中でどういう展示を作っていくかというのが今回の課題だった訳ですけれど、溝辺さん、いかがでしたでしょうか。

溝辺：やはり比較をしていくには、事例を集めていくことが第一だということです。今回、中之町のだんじりと原野農芸博物館のだんじりと二つを比べるのですが、あくまでこれは方法論の最初を試してみたということですから、今後どんどん事例を増やしていけたらいいなと思っています。だんじりのモノ調査の難しさ、民俗学的に見るときに難しいのは、一台のものを本当に一人の人が彫っているのかとか、或いは作者が何人かいるんじゃないかとか、あとはだんじり自体も売り買いがされていて、だんだん伝承もずれてきているというのがあって、だんじりを民俗学的に研究するというのは今まで非常に難しくて。ですから民俗学者が敬遠してきたところだと思うのです。ですから、そういったことを一個ずつ突き詰めてやっていくしかないだろうというので、今回思い切って調査に踏み切った訳ですけれども、今年 1 年ではまだまだ課題が多いということですから、どんどん調査をしていけたらいいなという風に思っています。

笠井：だんじりというのは大変扱いにくいのです。なぜ扱いにくいかというと、一つは町会の持ち物であるということですね。それから、自分のところが一番だと思っていることです。だから、扱うのだったら全部平等に扱わないとだめなのですよ。

また、一番の難点は何かというと売り買いするということなのですよ。だから、もともとは今の原野さんのだんじりも、豊中にあって吹田にあって東大阪にあってというように、どんどん遡っていくということです。

岸和田のように下だんじりって言って、下にもっと重心がある、そういうものの方がなんかだんじりで良いように思われていて、なんか大東にあるだんじりは背丈だけ大きいけどゆっくり引っ張っているなぁという風に思われたりね。なんか威勢がないなぁとか思われたりしている訳なのです。地域性のこと、それから売買をしたり、その資料として扱うのは非常に難しいということですね。

もう一つの問題点は、非常にだんじりは大きいのでお祭りの前後しか出してもらえないということがあるのですね。特に大東のだんじりは背丈が高いので写真を撮るだけでも大変なのですよね。これからまだいろいろな調査をお願いすると思うのですけど、私どもが調査をしたらどんなメリットがあるかというと、今回調査で作成したデータは地元にお返ししますので、是非ご協力いただけたらなぁと思っております。

笠井：それでは、今回の調査を含めた意義について、大阪から奄美まで運ばれて、また被災して復興したことについて、原野さんにお話いただけたらと思います。

原野： 何故、大阪にある博物館が奄美に移転したのか、よく質問されます。口の悪い研究者に言われた事がありますが、原野は「奄美に夜逃げした」と言われた事がありますが、奄美には縁者もいないし、何んら関係のない所に移転するわけですので、そのように言われてもしかたないのですが、先代はこれからの博物館は、もっと自然豊かな場所で活動するのが一番と考え、自然を味方に付ける事によって付加価値を付けようと考えたと思いますが、しかし私は本当のところ、固定資産税の高騰が博物館運営を圧迫したのが最大の理由でないかと思います。

元々、博物館の敷地は千里丘陵の面影が残る豊中と吹田市のさかい目あたりで、利便性も悪く一面の竹やぶでした。当然、固定資産税も安かった。ところが、先に述べましたが、区画事業・新御堂筋と地下鉄の延長に駅も新設され、土地の評価額が上がり当然、固定資産税も高くなり運営に大きく影響したのが原因。もっと安い土地を求めて奄美に「屋うつり」する方法しか私立博物館の存続はなかったと思う。

話が少し長くなりますが、日本にある博物館は五千とも六千ともいわれているが全施設が海を渡って移設したという話はあまり聞いたことありませんが、前述した理由でだんじりも単に加えられだけの事です。

何も喜んで「だんじり」を多額な費用をかけ奄美大島に運んだわけではありません。

初め、先代はもう地元に引きとってもらう考えでした。ところが、その時にマスコミもこられ、「町の文化財」を横取りしたような対応でしたので、急に奄美へ持っていくようになった。また、それから大変で、園内の移動ではなく、海を越える移動。どうやって運ぼうかな。太鼓正さんに相談したり、だんじりに詳しい研究者に話を伺い、奄美へ移送しました。現地では収納できる施設はなく新たに高さ 5mの「だんじり」が入る展示場を新設し骨組と屋根が出来た時に入れ、後に壁などつくりました。だんじりが自由に出入する開口部を造る計画も考えましたが、奄美は「台風銀座」といわれる位で、強風も考慮しなければならない、そのために建築費用も嵩むため、その工法は中止し自由に出入できなくなる工法選びました。

ここでは詳しい話ができませんが、ある自治会の会長さんが行政にも相談していますので、自治会に返却してほしい旨の話もありましたが、当方は運送費を自治会で負担していただけるなら返却いたしますと解答しましたが、残念ながら明確な返事もなく中断し実現しなかった。その後、吹田市の高浜神社の近くに「町おこし」のために「だんじり」を展示している所がありますが、その所にも、赴き、再度その話をしましたところ、雲をつかむような話であった。さらに博物館のある学芸員の方は「運送費はそちらが負担していただけるのですか」一方的な話でしたので断念しました。

私はこのような経緯があったので、よい印象はありません。そして入館者によく言われた事は、

何故、「奄美にだんじりがあるの」と不思議そうな顔で聞かれる事がよくありました。その度に当方も困りました。また熱心な「だんじり」ファンが本土から来られもっと「近くにあればよいなのに」などの嘆きの声も聞いた事が度々ありましたが、何も喜んで「だんじり」を奄美大島へ運んだわけではありません。文化も異なる所ではなく、地元に落ち着くのが一番いいと考えておりますが、諸般の事情で結局は奄美にとなったわけですと説明したことがあります。

その後に 2010 年 10 月 20 日の奄美豪雨で大規模の「土石流」が発生し「だんじり」はじめ博物館資料(とくに展示資料)が壊滅的被害を受けた。しかしこの災害（山崩れ）の原因は本当に単なる自然災害といえるのであろうか。私は「奄振の置き土産（犠牲者)」と確信しています。

この土石流で中破した「だんじり」の太鼓はこの災害の中、運よく無キズの状態であった。私はこの太鼓を復興のシンボルと考え、そしてだんじり本体は、この災害を風化させないためにモニュメントと考え大野木先生にご相談を申し上げた所、その事よりも「だんじり」の彫りものに驚嘆され以後モニュメントの話には関心を一切示さず、素晴らしい見事な彫物と称え、今回のこの展示会に発展しました。

笠井：次に、伊達先生には資料化に向けて何かご苦労されたところがあれば教えて下さい。

伊達：私が苦労するというよりも、学生たち 4 人が苦労しながら資料化に向けてどうすればいいかということを常に考えてくれました。その中で大東の学芸員さんとか、市民学芸員さんたちの指導を受けながら、このだんじりの部材の資料化ということにこぎつけた訳です。震災の後、無形民俗文化財に対する評価が変わってきました。無形民俗文化財は、地域の人々の心を一つにする、と言われています。だんじりは、もともと有形の民俗文化財です。でも、そこで祭りがあるということは無形のものです。そのどちらを残すかというと、どちらも残さなければなりません。私はこちらの 32 基のだんじりは全て見たわけではありませんが、コマ、車輪をとってもそうなんですけれども、元々は一木で作って、お祭りが終わったら次の日から水に浸けて保管するっていうのが習わしです。けれども、破損した場合、修理をするには費用がかかります。これは大東市の例ではありませんが、一木で作られた車輪を集成材の組み物に変えて復元したところがあります。一木にこだわってお金をかけるよりも、だんじり本体の修理に重点を置くことを選択されました。一木のコマに亀裂がはいった時に全てを変える必要があり、若い人たちの負担を少なくするために車輪を集成材で作られました。また別の地域では、タイヤにしたところもあります。それでもだんじりを用いたお祭りは残ります。ですから部材の資料化という意味では、何をどう残すか、どう残して来られたかということも合わせて資料化をしていかないといけないのかなと思っています。

笠井：市民の人と共働するというのはすごい大変じゃないですか。その中で、どうして市民とするいう意義はどこにありますか。

武井：そうですね、「共働」っていうのはすごい難しいことやなぁとつくづく思いました。というのは、こちらが市民を利用するのではなく、そしてまた向こうにも利用されるのではなく、同じだけ力を出し合う環境を作るというのは、そう簡単なことではないのかなというのが、今の思っているところです。

そして、同じだけ力を出し合うためには、やはり意見を言い合える信頼関係を築いておくというのが大切なのかな、とは思いました。それはもちろん、力を貸してくださる市民学芸員さんに対してもそうですし、お世話になっている保存会の方々であったり、神社などにある文化財を守られている地域の方と一緒に何かをするときもそうなのですけれども、同じだけ力を出し合って、何か一緒にやっていく時には、信頼関係が非常に重要なんのだと感じました。

また、学芸員が市民と共働することで成長する、独りよがりな博物館、或いは独りよがりな学芸員ではなくて地域の中で一緒に活動させていただくことで、色々なところからアドバイスやご指摘やご意見をいただきながら成長できるのが、もう一つのメリットかなと思いました。

笠井：私どもの資料館のコンセプトは、「市民とつくる資料館」なのですね。今日は理想的で、市民の、それも、日頃だんじりが大好きな人が集まってるなぁ。そういう方々と、市民学芸員さんと先生方とが集まってこれだけいろんなことが出来るっていうのがすごい、すばらしい事やなと思っています。それでは、もう一度溝辺さんに今回の調査の意義について、何か強調したいところがあればどうぞ。

溝辺：先ほど言ったことにも重なるのですけど、やはり民俗学的に難しかったこと、だんじりの調査にモノから入っていくということですね。先ほどだんじり調査を続けていきたい、という風に言いましたけども、例えばこの大東市だけでそういう気運があるだけでは、なかなかその先に進めることは出来ないのかなと思っています。やはり各自治体に資料館ですとか、或いは文化財保護課とかございますけれども、そういった人たちと連携していかない限り、我々は大東から抜け出すことが出来ない、ということです。今回のように「小松源助から探る」という風に調査を続けようとしたときに、必ず他市との共働関係というのも必要になってきて、協力を仰ぎながらやっていくのも手ですし、あとはそれぞれの自治体の文化財に係わる人たちに、こういう方法論もありますよというのを提示出来たら、あとはそこで調査を進めてもらうということも出来ます。ですから今回の一連の活動を、今日来ていただいた皆さんに知ってもらうというのも確かなのですけれども、他の自治体の文化財に関わる仕事をされている方たちにも知っていただいてですね、それで大阪市内・大阪府内全域のだんじりを調査していこうという気運がだんだん盛り上がってくればいいのかなというように思っております。

笠井：今回、是非だんじりお好きな皆さんにご意見をお聞かせいただいたりご協力いただきたいのですが、だんじりを資料化するというモデル事業になるのじゃないかな、と思っているのですね。

そしたら次、大野木先生に今回の調査・研究・展示の意義について、いかがでしょうか。

大野木：僕は、とりあえずもっと大きくしたいから、大阪府下や関西全域で研究すべきやという風に思いますね。僕はとりあえず、市民がこうやってやってることが、とっても大事なことで、それを一つのだんじりという共有物、皆で共有しながら、そこでいろんなことを勉強したり調査したり出来る。博物館に非常に大きな機能があると思うのが、「コミュニティーづくり」なのですね。いろんなところで町興し・村興し、うちの大学はなんでこんなところまで来てもやってるのやというようなことがあるんですけど、京都からわざわざ出て来て。ところが、うちの大学は年間、言ってみれば産学連携的なことを、だいたい数十件やっているのですよ。たった三千ちょっとの学生なのですけど。それで毎年、600 人を超える学生が参加するのですね。それがうちの一つの売りでもあるんです。そこでやってる大きな仕事が、実は町興し・村興し・コミュニティーづくりが非常に大きくなりました。そういうところでいつもやってると、やはり何が上手くいくかと言うと、こういうシンボルがあるということなのですね。

だんじりというと祭りが一つあって、それが人を非常に集めやすい、気持ちを一つに出来るということ。祭りが本来そういうものなのですよね。祭りというのは、ある面では宗教がかっているかもしれないのだけど、そういう一つの宗教で人と皆がまとめ上げて、コミュニティーをしっかりやろうっていう機能が非常に上手く働いている訳です。そういうところに、研究なり調査がはいるということは、人間の営みの非常に大事な部分をしっかりと調査しているということと、実は繋がってくるのですね。そういう面で非常にこれは意味のあることだし、そしてこういう良いテーマのもとに今後も、続けてった方が僕はいいと思います。それが、非常にだんじりはシンボルだし良いなあと思っています。ずっとこれがこの資料館の、まとめる大きな要素になってくるように思っています。是非継続をお願いしたいという風には思います。

笠井：先生が今言われた、だんじりがツールだ、ということです。コミュニケーションツールだということがあるのですね。地域を元気づけたり、その祭りを見に来た人々にそれを話をするということです。

実はだんじりは、皆さんがお持ちなのですね。私たちはそれを、見せてもらったり、調査をさせ

てもらうので、立場は皆さんの方が上なのですよ。こんな皆さんの身近にあって、大東の宝だと思うのですね。大東の宝としてのだんじりというのを、これからどういう風に活かしていくかっていうのは、やっぱり逃げられないテーマかなというように思います。それでは、松井さんにお聞きしたいのですが、今回参加されて市民学芸員として、率直なところを本音でどうぞ。

松井：非常に難しい問題なのですけど、私個人的に感じたのは、大東市の文化財の一つであるだんじりというものを、一つのテーマをもって間近で見た。今まででしたら、テーマをもって見なかったのですね。テーマをもって見ることは、非常に貴重な体験だった。ですから、結果的にテーマをもって見るということは、個人的にも大きな成果であった。ですから、何気なく見る、とか、何気なく通り過ごしてしまうようなことでも、テーマをもって見るということの大切さを、今回の調査で全然知識の無い私でも分かるようなところがたくさんあって、非常に貴重な体験をさせてもらったなということは感じております。また、もう一つは、自分の引き出しが一つ増えたなと。ですから、そういう意味においても非常に良かったんではないかな、と感じています。

笠井：これも市民学芸員の人と一緒にやったのですが、神社に狛犬・鳥居に銘文とかがあるのですね。それらは今まで気にしなかったのですけど、それも一緒に見に行くうちに気になるようになった。やっぱり、「意識」なんですね。こういうことを「意識して見る」ということです。だから今までは、「あ、大東のだんじりやなぁ」って見るだけやったと思うのですけど、今は違いますよね。

松井：そうですね。なかなか、近い距離で見ることが可能になってきましたね。

笠井：茅谷さん、どうですか。彼女は京都におられるのです。京都から出てきて、調査をして、また京都へ帰るという生活をしていただいたのですけれど、いかがでしたか。

茅谷：私たちは、大学で文化財の保存と修復ということについて学んでいて、学生でこのだんじりの作業に参加が出来たのですけど、実際のものを目の前にして実際のものについて先生にご相談したり、資料館の学芸員のかたにご相談したりとかしつつ、試行錯誤して物を保存したり、また直したりということに関して作業が出来たっていうことは、すごく大きな学びになったし貴重な機会だったな、と思ったことと、私たち学生が出来ることから引き継いでいただいて資料館のかたに今回、このような形で調査や展示をしていただけたのがとても嬉しかったし、すごく良い経験になったな、と思ってとても嬉しい想いでいっぱいです。

笠井：今、言われたのは、数年前から京都造形大学の学生さんが本当にどろどろになりながら、水で洗いながら乾かしていった作業を、昨年の夏までやっておられたのですね。そのあと、私どもが引き継いで学生さんと一緒になって調査・展示をして、今回ちゃんと冊子にしようと思っているのですけど、そこまでもっていったというのはやはり大変大きな意義があったかな、という風に思います。これからの展望について、これからどうしていけば良いか、という意見をお聞かせいただきたいと思います。伊達先生から、どうでしょうか。

伊達：私の今日の配布資料に、最後になりますけれども、『しかし、だんじりのすべての部材が整理できたわけではなく、かつての壮大なだんじりを物語る大屋根や小屋根、コマなどは未だ手つかずの状態である。あの被災からせっかく救出されただんじりであり、そのため今後も資料化に向けての活動を継続していく必要がある』と、記述させていただきました。もう、私の気持ちはこの通りです。

笠井：なるほど。大野木先生はいかがでしょうか。

大野木：本当に、これはすごいものやということを、やっぱり市民がまず認識してほしいですね。誇るべきものがここにあるのやということをね。それを、やっぱり全国区にどうやって持って行って、それは実は、我々こう彫刻から見たら、こんなものやってるところってもう無いのやで。これは、市民がまた、彫物作りたいとか、これを修理したいというときに、そういう要求に対して物作りがこたえる状況をどう作るか、なのですね。

そうしないと、どんどんジリ貧になっていく。仕事が無くなるということは技術が無くなるということです。その辺は、危機的状況で、世界中のなかでこんなことやっているところは無いというものを、残しておきたい。そういう面でも、このだんじりはもっともっとちゃんとですね、皆で再確認しましょう・もっともっとこれをちゃんとした形で、良いものとして、宝物として皆で保存し、そしてそれを皆で愛でて楽しむというようなものに、していったらどうかなと思います。そのために、ここではその検証をしなければいけません。いろんな形で、再発見をここでやってですね、皆で良く知ってもらいたいということを、この活動の中でやっていただければと思ってます。

笠井：武井さんにもお聞きします。

武井：やはり今後の展望として、だんじりに限らず、もっと多くの人に資料館に来てほしい、関わってほしいと思います。特に、今まで来られていないような人にも足を運んでいただきたいなと思っています。

その一つの方法として、だんじりです。だんじりに興味をお持ちでない方にだんじりの彫物の魅力を伝えるツールを、今後は市民学芸員さんとか、或いは学生さんと一緒に作っていって、こういう風な見方が出来るよとか、こういう面白さがあるよっていうのを、もっと人に伝えていけるような活動をしていきたいな、と思っています。

笠井：溝辺さんは、どのように考えますか？

溝辺：そうですね。大きな展望については、先ほど言ったことです。ものすごく細かいことでは、特に来年度とかではなく、明日からでも出来るようなことなんですけれども、今回の展示や調査の言い訳でもあります。結局、下絵化する、トレースして図案化するということのメリットとして、文献史料にあるような、元の下絵同士で比べるっていうところまで最終的には持っていきたかった訳です。ですから今回の展示、調査ではそこまで出来なかったので、これが明日から始まるような課題になるのかなと思います。下絵の図案集というのは何点も残されていますから、もしかしたらその図案集の中に同じ構図のものが出てくるかもしれない。そこまでいくと、トレース図というのが、もっと大きな役割を果たすかもしれませんし、そこでの比較をしていくと、もしかしたら時代的な流行り廃りというのが見つかってくるかもしれないです。ですから、文献資料をもっと漁っていかなければ、という風に思います。

笠井：わかりました。来年度の文化庁の補助金の申請書を書きましょう。それでもう一年、せめて来年は継続するという方向でいきますが、これは実は私どもだけでやるという訳にはいきません。今回は、中之町のだんじりと原野さんのところのだんじりを中心にしましたが、皆さんのところのだんじりを調査にいかしていただきたい。

それではもう時間なので、最後に順に一言ずつお話をいただいて終わりたい、という風に思いますが、どうでしょう。

武井：本日、お越しいただいておりますが、中之町地車保存会の皆様、今回は本当にお世話になり、ありがとうございました。成果は、先ほどから申しておりますように、報告書にしてお戻したいと思いますので、また今後ともよろしくお願いいたします。

松井：今回の場合は、私たちの経験としては初めてだったので、どういう形に収まるのか、どういう形で作るのかというのはイメージがつかなかったのですね。また、市民学芸員としてだんだん不安の方も大きくなったのです。でも最終的に展示された資料を見たときには、安心しました。

茅谷：私たち、奄美の作業から大東の作業に関わって、奄美でのばらばらになっただんじりではなく、こちらで曳行されているものだとか、祭りの中で出ているだんじりもたくさん見せて頂いて、すごく感動しました。また、こういう機会があれば学生も関わっていきたいと思います。ありがとうございました。

伊達：皆様、本当に私どもの学生が調査に参加させて頂きまして、いろいろお世話になり、ありがとうございました。そこで、先ほども少し紹介しましたが、茅谷の他にあちらに三人おります。この四人というのは四回生で、来年調査に参加出来

るかどうかは分からないですが、この四人で奄美の熱い中、部材をひとつひとつピックアップしているときに、「小松源助」という銘を見付けました。それがきっかけで、このような立派な展覧会・フォーラムを開催させていただくことが出来ました。

甲斐規予子、梅木友香、三桝友梨香です。それから、茅谷友惟の四人が作業をして、だんじりの資料化ということに従事しました。皆さん、お疲れ様でした。

大野木：うちの大学は、いろんな形で社会の中で学生が学ぶという教育法をとっています。そこで、非常に学生が成長する訳です。そういう面でこれからも、この資料館とも強く関係を結べて、学ばせてもらえたらいいと思っていますし、いろいろとお手伝い出来たらいいなと思っています。本当に、ありがとうございました。

原野：今までお話しましたが、今回の話は私には平常心で考えることが難しいのです。母（101 歳で他界）の本葬の際中に災害が発生しています。無意味な造成工事を行い。本当に自然災害か。土石流にあって多くの方々からご寄贈してもらった資料が流失したのが一番残念ですが事故当日は休館日でしたので人災はなかったのが幸いでした。その一方、この展示会は、土石流にあったことで「だんじり」が壊れ色々な事が判明したわけで非常に複雑な気持で「虎は死して皮を留め」という心境です。

そして災害後、リニューアルオープンの「クサビ式締め太鼓」、先ほどのだんじりの太鼓が大きく影響しています。また、被災直後から京都造形芸術大学、大野木啓人副学長、伊達仁美教授はじめ学生さんには本当にありがとうございました。当館の復興とこの展示会は皆様のおかげです。

溝辺：私はもともと農機具の研究をやっていて、だんじりとか祭礼というのは全く専門外であったのですけれども、なんだかんだいってここ 3・4 年の間、春から秋まで、お祭りを見て回ってるという風な状況になっています。たぶん、農機具の研究をする時間よりも、祭礼調査のほうが、時間がかかってると思います。また、これからも事業あるなしに関わらず、お祭りは見に行くと思いますので、皆さんどうぞよろしくお願いいたします。

笠井：それから、もう一人ご紹介しておきたいと思います。今回のポスターなどのデザインをやっていただいた、大野木さん、デザインを作る上での苦労を一言どうぞ。

大野木喜世：今回、チラシ・ポスターなどのデザインをさせていただきました、大野木喜世と申します。今年度から京都造形芸術大学の通信教育部でデザインを勉強しています。まだ、デザインを勉強し始めて一年経っていないところに、未熟ながらこのような形で自分の作品を出すことができ、とても喜ばしいことだと思います。私もだんじりのことは一切知らなかったのですが、良く見てみると、かなり圧倒されました。これからどのような素晴らしいものが社会に出てくるのか、楽しみにしています。

笠井：それから、今回ご協力いただいた中之町さん。今回の調査をずっとご協力いただいたので、是非一言お願いいたします。

中之町地車保存会：台風でなかなか日程が合わなくて、調査が上手くいかなかったのですけども、このような展示が出来て喜んでおります。これからもよろしくお願いします。ありがとうございました。

笠井：ありがとうございました。最後ですけれど、大東の宝に、大きなものが二つあると思っています。一つは、春の野崎まいりです。

そして、もう一つ。毎年秋には、だんじり展をやろうと決めました。だから、春は野崎、秋はだんじりでおこないますので、これから各町会のだんじりを毎年紹介していきます。資料調査をして、展示をしていくということをやっていきたいと思いますので、是非各保存会の方々にご協力いただきたいと思います。

「『だんじりの彫物～小松源助から探る～』とは」

京都造形芸術大学　大野木啓人

今の流れをずっと聞いて、だんじりというものをずいぶん短期間で知ってきたこと、分かってきたことがあったという気がします。これは幸いかな、ここの学芸員の人が 3 人いて手分けも出来るし、また市民の人たちにいろんなだんじりをちゃんと資料として集めて来てもらっている。優秀な学芸員が一人いて、それで全部やれるというような話っていうのはよくあるのだけど、こんなに言ってみたらそれぞれは、だんじりの専門家でもなんでもない訳ですよね。そういう人たちが、我々が一緒になって非常に短い期間のなかでここまでのことを勉強できた。そしてそこでまだまだやらなければならないこと、知らなければならないことが見つかってきたっていうこと、これはやはり一人の人がやるよりも、いかに短い時間の中で、またいろんなことをそこから見付けることが出来る。これが一人の人がやっていたら一人が価値観で決めてやっているから、もっと狭いところでは深く入れるかもしれないけれど、いろんなことがあるということはなかなかわからないんですね。そういう面でも、こういうプロジェクトが生まれてきて、そして今後も続けていけるというのがとてもいいなぁと思っています。

私は今日、20 分くらい時間を取ってもらっているのですけれども、まず私自身がなぜこんなところにいるかということなのです。実際自分の人生は不思議やなぁと。僕は今ディスプレーの世界でやっていますけど、一人で人の前でしゃべれなかったのですよ。本当にしゃべれなかったのが、今、大学に行くおかげで人の前でしゃべれるようになってきているのですね。

もともとは絵が得意だっただけなのです。それで芸術系の大学に行けば何とかなると思い、競争率の低かった彫刻に偶然入ることになる。そのなかで、出会った彫刻が、実は僕の運命というか、そういうものが大きく変わっていく訳です。

4 回生のときには、奈良の仏師さんのところで寄木の彫刻をやりました。今、これは厳島神社の横に資料館があるのですけれども、そこの平清盛像、あそこに私の作品がちゃんと置いてあります。等身大の仏像なのですけれども。こんなのを学生時代やらしてもらっているのですね。

結局そのあと、卒業してから色々な現代彫刻をやるのですけど、最初はやり易い楠木で彫刻をやってたわけです。楠木はすごく彫りやすいし、日本の彫刻は細かい細工のしているようなことは、楠とか桂とかやり易いやわらかい木でやるのが普通なのですね。僕は、それでは力強さがないと思

ったのでケヤキを選ぶようになって、そしたら道具を全部変えなければならないことに気づきました。ケヤキの彫物は、普通のノミでは出来ないのです。あれだけ固いものを彫ろうとすると、刃の角度を上げて力に耐えるようにします。すぐに欠けますから。そういう面では道具まで堅木用を選ぶ訳です。そういった経験が今回も役立ったと思っています。それから大学卒業後、ディスプレー会社に行くわけです。ディスプレー会社になぜ行ったかというと、マネキンを作るために行ったのです。マネキンを作るということは、別にマネキンの話ではないのですけど、あそこに相というのがあるのです。相というのは、マネキン作家が日本でも何人かいる訳ですが、そのなかで誰が作ったかというのはだいたい読めるのです。あっ！、これは誰の作やなっていうのは。なぜ読めるのか、これはそれぞれ持っている特徴の相なのですね。これが分かると例えば、このだんじりの作家が誰なのか、というのをよく見て深くやってたら、だんだん見えてくるのです。初めは、七彩という会社に行くのですけれども、どれがうちのマネキンで、どれが他社のマネキンか、町の中で見ていたときにどれも同じにしか見えないのです。ところが先輩が、これはうちでこれはどこのやということを言うのですね。なぜ判るのだろうと最初思っていたのですけど、5年マネキンをずっと見てたらわかってきました。それも、相というものをちゃんと見極めることが出来るんですね。これは怖いですね。たぶん親子の関係でも、「やっぱり親子やな」というくらい、顔の相が似てきたりとかあるじゃないですか。あれも実は、そういうところの見極めで、何がどこがどうなのだということがはっきりと言えないけども、ちゃんとその辺が見えてくる、ということです。これを、だんじりという一つの対象物があってそれを色々見ていくと、必ず皆さん誰でも、「あ、これはこの人と違う」とか、「これはものすごく上手いけど、これは下手だ」とかそういうことまで見えます。これは不思議なもので、見れば見るほどわかり易いということです。その辺のことを僕は、仕事をやりながら、デザインの勉強をしながら発見してきたと思います。

それで、奄美のだんじりとの出会いがある訳です。これは前段で、伊達先生等が言ってきたことですが、ここで私も初めて泥だらけのくちゃくちゃになっただんじりを見せてもらった訳ですね。今までだんじりなんか、岸和田で映像しか見てなかったものを、やっぱり実物を見たときに、これはすごいと思いました。一瞬に僕は、「こんなすごい彫刻があるのか」ということを本当に驚いた訳です。これはこのままにしておいてはダメだ、という思いを持ちました。

武井さんが専門のようですが、私は、仏像彫刻は長い歴史の中で様式や形体や流れ等、研究も随分とやってこられました。だんじりはそういう面では、歴史も様式もほとんど資料がない。これは逆に言うと、とてもまだ研究が未完の業界のなかで、皆で幅広くやれば面白いことになる。しかも

私が見る限り、現代の彫刻のなかでというか近代の彫刻のなかで、このレベルのものはなかなかないと思っています。これは私が奄美で見て、一瞬にして、「こんなすごいものがあったのか」というのを思ったのは、彫刻の良さ・レベルの高さ、半レリーフの技術、そういうものが自分の目から見て、「こんなすごいものが世の中にあるんだ」という発見だった訳ですね。ですから、これは非常に文化財の価値が高い、本当にこれをもう少し皆で社会の中で再発見して、そしてこんなすごいものがこの大阪一帯にあるのだということを、もっと社会の中で知らせるべきでないかという風に思ったわけです。

ここで出てくる獅噛が、この後ろ側のこれが、今展示しているものです。写真に写っているこういう中の、転がっているなかで、私は小さな彫刻を見てすごいと思ったのです。それが実はこれだったんです。十二支の中の一つです。これは最初に目についただけなのですけど、いやあすごいなと。なにがすごいかと言うと、これは生きているのですね。これだけ簡単に、平べったいものなのですけども、平べったいものの中にこれだけの生命感と精神性までこの中にある、というのを感じ取ったんです。それで、こんなにすごいものがこの部材の小さなところにあるということで、もっとすごい真正面の龍とか獅噛を見たら、本当にびっくりしました。僕が「これは放っておいてはだめだ」と思ったのは、実際には今の小さな彫物からでした。そして、じっくり見てみると実にすごいんです。ここには、ただ単なる形が美しいとか、しっかり出来ているというだけではなくて、魂的なものがしっかり入っているということですね。

そういうものをひとつひとつの中に見ていくと、例えばこの麒麟の鱗の問題でも一つ一つ丁寧に掘り込んで、すごく深いのです。普通は半分レリーフなのですが、これほど深く彫らないです。それが、ものすごくこれでもかというくらい深く彫っているのですね。これは自分の名前の「小松源助」というサインが入っている部材のところなのですけど、たぶんこれにはかなり本人も力を入れているはずです。小さいけど、力を入れているのですね。だから、この獅子は小さいけど、自分の獅子が自分というものをちゃんと精神を込めて生きているという状況を作っていると思います。まず他の色々なものを見てもなかなかここまでの彫りはないと。彫りがただ単に上手いという訳ではないのです。そこに生きているものがあるということです。

びっくりしたのはこれなのですね。これはケヤキで出来ているのですよ。僕らは彫刻をやっているからよくわかるのです。ケヤキで、こんな細いものを作るなんて至難の業です。なぜかというとすぐ折れます。裂けるのですね。で、固いでしょう。だから、力を入れないと彫れないのに、力を入れると折れたりするのですよね。ヒビが入らなくてここまでのものはね。簡単に作り上げている

のですよね。彫りにも、これもこういうところのノミの跡を見ると、そんなに丁寧にやってないのです。だからこれは見事な、僕から言わせたらこんなものは今、だれが出来るんやろうというようなものが、至る所にあるということです。これは、普通のやわらかい楠木とか桂あたりで作るのであれば、割と簡単なのです。勢いで、スッと流れを作ることが出来るんですけど、固いですから簡単にこう、シュッと行かないのです。一筆書きのときにも、スピードを上げたら割と流れの強いものが出来るじゃないですか。これが、ゆっくりしか出来ない訳ですよ。それが、これだけの綺麗な流れを作るというのはなかなか、僕はすごい技術だと思います。

それからこの雲も、前から見ると普通、「雲がもこもこといっぱいあるな」という感じですけど、普通こんなに雲を作るのに深さというのは作りません。これは横から見たら、これなのですけどね、一つの雲でもものすごくでこぼこしているのですよ。それが、隣のやつとちゃんと上下関係を作っている訳です。こんな凝り方というのは、よっぽど立体についてしっかりした把握をしていないと出来ないのです。普通、絵を描いて、そしてそれを基に彫っていく訳ですけど、そこにこの奥行感というのをどれだけ把握するかというのは、これも普通の彫刻をやっている人ぐらいではなかなか出来ないことなのですね。そういう面で、ものが残っているということが幸運です。これが次の時代に立体をやる人、例えば欄間の仕事をしたいという人、彫刻をやるという人、それからもちろんだんじりを彫るときもそうですが、こういうときにこれだけのものを超える人を是非、これがあったら出来るのじゃないかなという風に思っている訳です。だんじりはすごいですよ。彩色していませんから。つまり、形だけで勝負しているのです。これも、誇るべきものです。普通は、彫刻やってもいろんな面で凝っていたので、色を付けるのが多いのです。それでかなりごまかせます。でも、形だけであそこまでのことがやれているっていうのも、実はとても大変なことだしすごいです。そういう面で、この小松源助という彫物師が日本にいたこと、それをもう一度皆さんで再確認しながら、この素晴らしさはもっともっと世界に知ってもらい、このことを再評価しながら、今ある被災の現状から、これをこのまま放っておいていいのかな、というところに持っていきたいなぁと思っています。200 を超えるだんじりが大阪を中心にいっぱいある訳です。これ一つ一つに対して、もう一度日本中が彫物としての再発見をすると同時に、このバラバラになった、しかもだんじりの中でも本当にトップクラスの彫物があった、この奄美のだんじりをなんとかみんなの力で復興させられないか。皆で再認識してこんな文化財を放っておいたらだめじゃないかという運動に変えて、そしてこれをもう一度日本の宝物として再現出来たらいいなと願っている訳です。そういう面で是非、じっくりとあのすごい彫物を皆さんもう一度見て帰っていただければ幸いです。

おわりに

だんじりを活かした地域共働事業実行委員会

委員長　笠井敏光

大東市立歴史民俗資料館（以下、資料館）は、昭和６２年（１９８７）に市制３０周年を記念して開館しました。施設は、大東市立総合文化センターとして、文化ホール（サーティホール）・図書館・公民館との複合施設です。平成２０年（２００８）からは、施設すべてを指定管理者制度によって、民間に委ねることになりました。平成２４年（２０１２）には、資料館のみが新しく造られた大東市立歴史とスポーツふれあいセンターに移設されました。

資料館のコンセプトは、「市民とつくる資料館」としました。これは、「博物館世代論」における第三世代（市民参加型）に位置づけることができます。本来は、「市民がつくる」とし、市民主体としたいところですが、「市民と協働」する意味を考え、これにしました。

基本的な考え方は、次のとおりです。まず、展示の企画・調査・作業・展示・解説を「市民学芸員」と行うこととしました。市民から公募した「市民学芸員」を養成し、プロパーの学芸員と協働しますが、一般の「ボランティアガイド」とは区別し、市民がスタッフとして参画することを重視しました。

次に、「地域の宝物（地域遺産）」を発掘し、その価値を学習し、その成果を展示で表し、来館者に解説を行います。「市民」とともに注目しているのが、「地域」です。地域にある宝物（遺産）を「世界遺産」に対して「地域遺産」と位置付け、その発掘、学習を通して、市民が地域に学ぶ機会をつくり、その成果をアウトプットする「展示・解説」の場を設けるものです。

また、日常的に、市内の歴史文化遺産の基礎データを蓄積し、計画的な調査研究を行うことによって、資料の価値を明らかにします。資料館の展示を行うにあたっても、日常の調査研究が基本になることは間違いありません。市内の寺院・神社・石造物・民間信仰・建造物・古文書・城郭・遺跡・民俗資料などに常に眼を光らせ、いつでも対応できるような体制を整えます。

さらに、考古学・文献史学・民俗学・美術史学・博物館学等の学芸員を配置するとともに、外部の学識者とともに総合調査を行うこととしました。一般的には、なかなか揃わない各分野の学芸員を揃え、基礎調査を日常的に行うとともに、市民からの質問や問い合わせなどにも対応できるようにしています。

そのほか、文化遺産・図書館・学校・地域・団体等との連携を図り、資料館を軸に、これらの施設との連携を図り、ネットワークを構成します。そして、周辺の地域・企業・寺社・商店・駅・大学等と協力して地域の振興を図り、まちづくりや観光の拠点となるように考えました。

ここで、これまでの歩みを振り返り、今回の事業を位置づけたいと思います。

昭和６２年（１９８７）に資料館がオープンし約２０年間の直営の後、平成１８年（２００８）からは指定管理者制度に移行し、民間の管理運営となりました。

平成２０年度からは、いつも市民のそばにある資料館を目指してリニューアルオープンしました。これまでの常設展示を撤去し、あらたにストーリー性をもたせた時代区分で展示を再構成しました。あわせて、講演会・見学会・お話会・体験教室などの事業を開催しました。また、「博物館学芸員」とは何かを考え学芸員に興味をもってもらうため、「学芸員のお仕事講座」を実施しました。講座を通じて、学芸員の仕事や役割、資料の扱い方、文化財の概念、地域資料館の役割などを３回で学ぶ内容です。

平成２１年度から「市民学芸員講座」を開催します。内容は、市民学芸員としての基礎知識を身につけるもので、月１回×１２回の講義・実習で毎回３時間実施します。１０回以上の出席で市民学芸員を認定し、修了証を発行しました。主な内容は、考古学・文献史・民俗学・見学会・巻物の扱い方・民具の実測・地域遺産などです。この年度では２６名に修了証を授与しました。あわせて、２１年度特別展示「野崎まいりとお染・久松」の「見守り隊」も行いました。

平成２２年度からは、市民学芸員活動が始まりました。「市民とつくる特別展＝神社探訪・絵馬案内」に向けスタートしました。館が行う展示を調査段階から関わることによって、調査から展示のプロセスがわかり、展示の趣旨や意図を理解し、来館者への解説がスムーズに行われ、歴史・文化を伝える手段として確立しました。神社・絵馬を対象にした理由は、身近にありますが、あまり知られていないもので、神社を訪れ、奉納されたものを調べ、地域の方にお話をうかがい、モノ・人とふれあいながら、地域遺産の価値を見出すことができるからです。灯篭・狛犬・手水鉢などの年代、記銘内容、形などを記録し、絵馬の現状調査・絵馬の搬出・クリーニング・各絵馬を調査、解説文の作成や展示をおこないました。各自、好きな絵馬を選び、その解説文を作成し、展示キャプション・図録にも掲載します。また、「市民学芸員レポート」を創刊しました。内容は、市民学芸員を知ってもらいたい・もっと解説したい・苦労話を聞いてほしい・活動秘話など市民学芸員の思いを伝えるものです。

平成２３年度には、企画展「大東の風景」の中で「私のモノ語り」に出品・展示しました。市民学芸員が、各自で思い出深いモノを展示し、それぞれの思いを語るもので、また、大東市制５５周年にあわせ、年表風に展示しました。さらに、マンガ・おもちゃ・お菓子も展示、市民による写真・絵画の「のこしたい大東の風景」を公募するとともに、ウオーキングラリーでは、市民学芸員が案内しました。そして、資料館移転リニューアルに合わせスキルアップも図りました。半年間の閉館期間に、市民活動が活発な他施設を訪問し、活動の参考にするために、民家集落博物館・住まいのミュージアム・堺市立博物館・東洋陶磁美術館・今城塚歴史館において、市民スタッフより解説を聞き、その後相互交流会を開催しました。このことによって、市民活動に関するスキルアップを図り、各自の意識が高まりました。あわせて３つのグループに分かれて学習会を開催し、リニューアルに向けて、打ち合わせを重ねました。

平成２４年度には、リニューアルオープンし、「常設展示　リニューアル：大東市と水とのかかわり」や「特別展示　堂山古墳群のひみつ」、また「堂山古墳群史跡広場」も公開されました。さらに、市民学芸員が企画から展示、普及まで手がけた「市民学芸員展：こんな大東み一つけた」も開催され、民具の紹介・市民学芸員の歩み・堂山の古墳解説映像・ジオラマでみる昭和３０年代の住道駅前・古堤街道をあるいての展示が行われました。あわせて、「市民学芸員連絡会」も発足しました。

平成２５年度には、「企画展：大東のだんじり」が開催され、地域への聞き取り調査、映像作成、展示などに市民学芸員が参画しました。また、「第２回　市民学芸員展」も開催されました。

平成２６年度における市民学芸員の主たる事業を今回の「だんじりを活かした地域共働事業」としました。原野農芸博物館や地域のだんじり保存会の協力のもと、京都造形芸術大学の学生とともに講義や実習を経て、大東市内のだんじりの調査を行い、その成果を展示しました。

今回の事業によって、市民が自ら居住する地域を見直し、地域に誇りをもてる良い機会になりました。また、地域の文化財の調査を通じて、地域・市民・博物館の連携を深めることもできました。さらに市民と学生が共働でだんじりの調査・研究・展示を行う中で、交流することができ、双方が学び合う環境を構築するという人材育成の目的も達成されました。今後も事業を継続させ、さらなる調査・研究が進むとともに、地域との共働により、人材の連携・交流が進むことを期待したいと思います。

謝　　辞

【機関・組織（五十音順・敬称略）】

赤井自治会、赤井消防団、江ノ口北若中地車会、江ノ口南若中地車保存会、大野地車保存会、押廻地車保存会、北野会、北之町地車保存会、京都造形芸術大学、京都造形芸術大学大学院、御領地車保存会、四條之町地車保存会、下野地車保存会、下野地車若中、新田地車保存会、吹田市教育委員会、吹田市立博物館、住道青年団、大箇だんじり会、太子田地車保存会、龍間自治会、谷川地車保存会、辻之町地車保存会、寺川地車保存会、中垣内地車保存会、中之町地車保存会、西ノ口若中、西諸福地車保存会、野崎第一地車保存会、野崎第二秋祭実行委員会、灰塚だんじり保存会、東之町地車保存会、東諸福地車保存会、氷野北野神社奉賛会、氷野地車保存会、平野屋地車保存会、深野北地車保存会、奉賛会（御供田）、朋来地車保存会、南町自治会（吹田市）、南新田・元町青年団、有限会社木下彫刻工芸

【個人（五十音順・敬称略）】

石橋恒彦、長田寛康、栗田美由紀、阪本常夫、中牧弘允、西俊三、西本安秀

◆本事業は文化庁「平成 26 年度文化芸術振興費補助金(地域と共働した美術館・博物館創造活動支援事業)」を得て、実施したものです。

◆奄美豪雨により被災しただんじりの調査ならびに整理につきましては、京都造形芸術大学保護者会「蒼山会」の研究助成金により実施しました。

文化庁平成 26 年度地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業

だんじりを活かした地域共働事業報告書

発 行 日：平成 27 年 3 月 31 日
編集発行：だんじりを活かした地域共働事業実行委員会
事 務 局：大東市立歴史民俗資料館
〒574-0015 大阪府大東市野崎３－６－１
電話 072-876-7011
印　　刷：株式会社アステム